
京 (みやこ) ・地域福祉パイロット事業 活動事例集



平成24年3月

京都市

当事例集の発行について

(まえがき)

(1) 地域福祉について

「地域福祉」を、「地域住民を主体として、住民・公共的団体・行政の協働により福祉課題の解決を図り、誰もが安心して健やかに暮らすことのできる地域づくりに取り組むこと」とするならば、住民が地域の福祉課題を的確にとらえ、主体的に活動を進めていくことが重要です。地域は住民の生活の場であり、地域における福祉活動の担い手は住民です。つまり、地域の実情に応じて、地域の社会資源を利用しながら、担い手と各関係機関が協働することが地域福祉の原点です。

(2) 京（みやこ）・地域福祉パイロット事業について

少子長寿化や核家族化等により多様化する福祉ニーズに対応するため、住民主体の先駆的な取組に対して事業費の一部の助成を行うとともに、他地域への拡大を促進する事業である「京（みやこ）・地域福祉パイロット事業」を平成16年度から実施しています。当事業では、平成23年度までに103件の事業を採択し、市域の地域福祉の向上及び推進に寄与しています。

(3) 当事例集発行の目的

助成先団体においては、当助成金を利用して事業実施の際の手法やノウハウの確立が可能となりました。事例集では、助成先団体の活動内容等を紹介することで、これらのノウハウを他地域へ波及させることを目的としています。

(4) 当事例集の構成

人口や世帯数、地域の概要と共に、当該団体の「活動のきっかけ・目的」、「活動内容」・「活動の特徴・活動から学べること」、「活動において工夫していること」、「今後の活動の方向性・目標」など、基礎的な地域の状況と併せて、他学区、他団体においても参考にさせていただける事項を掲載しています。

(5) 当事例集の取扱いについて

当事例集は、地域で新たに地域福祉活動を始めようとする団体の方々や、現在、活動に取り組まれている団体の方々の参考となるよう作成致しました。皆様の地域福祉活動の一助としていただければ幸いです。

この事例集の作成に当たり、御協力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

目 次

- 事例 1 ・紫野カルチャー亭 お年寄りもイキイキ！！聞き書きプロジェクト
・「学びの場・語りの場・つながりの場」が生み出す独居高齢者の組織化支援プロジェクト
紫野カルチャー亭運営協議会（北区紫野学区）・・・・・・・・・・ 1
- 事例 2 ・災害にも強いまちづくり みんなで支える要援護者支援
大宮学区社会福祉協議会（北区大宮学区）・・・・・・・・・・
- 事例 3 ・紫竹学区安心安全・地域福祉活動推進事業
紫竹安心安全・地域福祉活動推進委員会（北区紫竹学区）・・・・・・・・
- 事例 4 ・子ども 110 番のいえスタンプラリー
二条城北小学校運営協議会・PTA（待賢住民福祉連合協議会）・・・
- 事例 5 ・日本語を母語としない家族の子育て支援～地域・人とのつながりから、
視野を広げて子育てを楽しもう～
Jafore（ジャフォール）～日本語を母語としない家族のための
子育て支援チーム～（左京区）・・・・・・・・・・
- 事例 6 ・スマイルミュージックフェスティバル
NPO法人音の風（東山区）・・・・・・・・・・
- 事例 7 ・会食のつどいと地域サロン（居場所づくり）
さくら（会食のつどい）（東山区）・・・・・・・・・・
- 事例 8 ・小地域福祉
沢ネット（山科区音羽沢町）・・・・・・・・・・
- 事例 9 ・高齢者サロン「リンリン」、子育てサロン「ユーユー」
有隣民生児童委員協議会（下京区有隣学区）・・・・・・・・・・
- 事例 10 ・ママ・パパ・プレママ・プレパパのためのワクワク子育て講座事業
京都南この本だいすきの会（南区久世学区）・・・・・・・・・・
- 事例 11 ・京北にここにこ・わくわくネットワーク事業
京北にここにこ・わくわくネットワーク協議会（右京区京北地区）・・・
- 事例 12 ・地域防災事業
松陽防災ネットワーク（西京区松陽学区）・・・・・・・・・・
- 事例 13 ・くらしの支援 ブルーキャップ
コスモス会（西京区福西学区）・・・・・・・・・・
- 事例 14 ・第 6 回砂川学区多世代交流会
伏見区砂川学区社会福祉協議会（伏見区砂川学区）・・・・・・・・・・
- 事例 15 ・茶房 やどり木
春日野学区社会福祉協議会（伏見区春日野学区）・・・・・・・・・・
- 事例 16 ・見せて元気 やって元気 いきいき筋トレで“健康づくり”
日野学区社会福祉協議会（いきいき筋トレクラブ・日野）（伏見区日野学区）・・・

- 事例 17 ・ ラウンドアイズ京都
 ラウンドアイズ京都（全市域）・・・・・・・・・・・・・・・・
- 事例 18 ・ 第 1 回世代間交流「ふれあい教室」
 一般財団法人まちの縁側クニハウス&まちの学び舎ハルハウス（全市域）・・
- 事例 19 ・ 子育てサポーター養成講座
 財団法人京都YWCA（全市域）・・・・・・・・・・・・・・・・
- 事例 20 ・ 男性介護者支援事業
 男性介護者を支援する会（全市域）・・・・・・・・・・・・・・・・

紫野カルチャー亭運営協議会

◎ 紫野カルチャー亭 お年寄りもイキイキ！！聞き書きプロジェクト（平成 22 年度）

◎ 「学びの場・語りの場・つながりの場」が生み出す一人暮らしの高齢者の組織化支援プロジェクト（平成 23 年度）

助成年度	平成 22 年度
助成金額	150,000円
助成年度	平成 23 年度
助成金額	150,000円

〔地区の概要（北区紫野学区）〕

地区人口	7,968人
地区世帯	3,684世帯

<数値は平成 22 年国勢調査結果による>

地域の状況

紫野学区は、古くからの歴史が息づき、西陣織関連産業が集積し、学生も多く住むなど、様々な要素が混在したまちですが、高齢化率が高く、高齢者夫婦世帯と単身高齢者世帯の割合も多い地域です。

活動のきっかけ・目的

活動地域である紫野学区は、地場産業である西陣織関連産業が集積した地域ですが、近年、同産業の衰退と共に、住民が地域外に働きに出ることが多く、地域住民間の交流が薄れつつあります。このような状況の中で、地域で孤立した高齢者を作らないための行動を起こすことが学区の課題となっていました。そこで、紫野学区社会福祉協議会と若い社会人で構成された紫野周辺のまちづくりを考えるサークル「フナツツ」が協働して立ち上げたのが、当事業を実施する団体「紫野カルチャー亭運営協議会」です。その後、「船岡山及び紫野を良くしよう」という目標を立て、共に活動を開始しました。

また、紫野学区社協が行った調査で、一人暮らしの高齢者が学区内に 225 人おられ、かつ近隣との付き合いのない方が多いという結果が判明し、このことが高齢者向けの聞き書きを実施するきっかけとなりました。

活動内容

<お年寄りもイキイキ！！聞き書きプロジェクト>

学生を始めとした若い方を募集し、彼らが高齢者に対して、「聞き書き」を実施して交流しました。「聞き書き」とは、人の話を聞き、その話をまとめる作業であり、若者が聞く側、高齢者が話す側となって交流を行い、世代間交流の機会を作ることを目的としています。この聞き書きを基に、その内容を地域の方と共有するため、発表会を開催しました。

最終的に、紫野に住む 8 人の方のお話しを聞き書きした内容をまとめ、一人一人の人生を通じて語られる、紫野での暮らし、町並み、文化、歴史が綴られた「紫野ノート」という物語集を作成しました。



実際の「聞き書き」



「聞き書き発表会」

＜「学びの場・語りの場・つながりの場」が生み出す一人暮らしの高齢者の組織化支援プロジェクト＞

「聞き書きプロジェクト」に引き続くこととして、紫野学区のまち魅力や資源を生かして、まちを元気にする活動を進め、地域に入っていく中で、当初からの目標でもある一人暮らしの高齢者を孤立させず、紫野学区において主体となり、安心して暮らしていただくには、地域全体で包括的な支援をしていく必要があるということが、課題として浮かび上がりました。

そこで、23年度は、住み慣れた地域で自分らしく生きることができるということをテーマに、「学びの場」、「語りの場」、「つながりの場」をキーワードにし、一人暮らしの高齢者が主体となれるコミュニティづくりを目指すこととしました。

初めに、大学生も参加して紫野学区のまち歩き、地域資源探しを行い、当学区の特徴や抱える課題を見つけて発表しました。更には、民生委員、学区社協、地域包括支援センター等と佛教大学が連携をとりながら、一人暮らしの高齢者のニーズ調査を実施し、次のステップとして喫茶形式の参加型講座と若者との交流会を開き、調査結果に基づいたニーズの高いテーマを中心に、学んでいただきました（「防災」、「健康」など）。



まちの特徴、資源の発表会

講座や交流会を重ねていく中で、地域の歌をつくるという企画が立ち上がり、高齢者の方の紫野への思いをつづった歌、「ふるさと紫野」が生まれ、23年11月に開催された紫野まつりで、紫野在住の一人暮らしの高齢者の方々が中心となり結成されたコーラスグループ（「パープルフレンズ」）の歌声で披露されました。



「知って得する防災講座」

歌詞には、紫野の好きなどころ、思い出に残っていることなど、地元への愛着を自由に挙げてもらい、集められた言葉をつなぎ合わせ、唱歌調のメロディーを付けました。その後、何度も集まりをもち、練習を重ねられた結果、北区民冬まつりの大きな舞台でも発表され、グループの絆がより深まることとなりました。

活動において工夫していること

若者と高齢者という普段から接点のない両者を聞き書きという「入りやすい」手段により意識的に結び付け、高齢者にとっては生きがいに、また若者にとっては地域に入っていく良い機会と位置付けることが可能となりました。

また、聞き書きをして報告書をまとめれば終わりということではなく、その後、双方が個人的な関係を続けていくことが理想的であり、当事業の本当の狙いである「高齢者の孤立の防止」にもつながっていくとのことでした。

さらに、聞き書きの実施に当たっては、訪問の前に相手方に連絡をすること、あるいは聞き書きに関する情報などはできる限り事前に自分で集めることなど、社会人として必要な基本的知識を聞き書きを通して地域で学ぶことができます。

23年度においては、聞き書きで得た経験やノウハウを生かして、交流会に参加された高齢者の「語り」をつむぎ、校歌のように学区全体で共有できる歌詞にし、高齢者でも自然と口ずさみやすい歌に仕上げました。地域の行事とも連携し、披露する場を設けたことにより、ただ参加するだけではなく、作り上げたものを皆で

発表することで、結束を強めてもらうとともに、歌づくりの初めから関わった若者との距離が確実に近づきました。



紫野まつりにて「ふるさと紫野」を合唱

活動の特徴、活動から学べること

紫野学区社協が主体であるため、地域からの信用があり地域で活動しやすいこと、また、フナツ側のスタッフが20代の方ばかりなので、聞き書きを実施する若者との間で仲間意識ができ、すぐに打ち解けることができました。

さらに、次代の担い手である若者を当プロジェクトの主体に置いていることが何よりももの強みであるといえます。当団体は、参加が見込みにくい若者に対しても、うまくアプローチし、20名程度の参加者を得ています。これはフナツの存在が大きいことがまず挙げられますが、「高齢者の人生を聞くことを入口に、地域を知ることができる。ひいては自分自身が見えてくる。」という参加者自身のメリットを具体的に提示したうえで募集しているため、参加数が多い理由の一つとして挙げられます。

学区社協などの地域の組織と若者のサークルが協力して一つの組織を立ち上げるという事例は多くありません。これまで、あまり結び付きのなかったグループとの合同によって、双方が刺激を受け、単なる連携を超えた責任と、かつてそれぞれの団体で不明確だった目標が、より明確になりました。

また、地縁型⇔テーマ型、地域組織⇔若者サークルといった、学区社協とフナツがそれぞれ異なる強みを持っていたため、お互いを補い合うことで、相乗効果を生み出すことも可能になりました。

活動における成果

当初は、一人暮らしの高齢者宅を訪問することを企画していましたが、聞き書きの効果や影響について、運営側の不安があり、22年度は、一人暮らしの高齢者に聞き書きをすることができませんでした。

しかしながら、聞き書きを通じて高齢者が自身の人生を振り返り、若者に語ることで、地域の主人公であり、地域社会の一員であるということ意識していただける機会をつくることができました。聞き書きを引き受けられた方からは、「この取組がなければ交わらない者同志が交流を持ったことの意義が大きい。また聞き書きをまとめてくれることは自分の人生を肯定され、生きた証として残ることがうれしい。」という声も寄せられました。

また、日ごろ、高齢者と接する機会の少ない、あるいは地域とのつながりが希薄な若者が、聞き書きプロジェクトに関わることにより、高齢者の人生観、生活観に触れ、「高齢者が住みやすい地域とはどのようなものか、考えるようになった。」、「一人一人、自分の住む地域に誇りを感じながら生きておられることに気付いた。」などの経験を得ることができました。

さらに、「一人暮らし高齢者の組織化支援」という目標を立て、23年度には、地域の中で取り残されがちな当事者同士のセルフヘルプ支援を「歌の合唱」という具体的なテーマに絞って行うことで、参加者同士の交流や主体性が生み出されるきっかけを作ることができました。

今後の方向性・目標

普段から見過ごされがちな一人暮らしの高齢者をはじめとした要援護者の課題等を、紫野カルチャー亭運営協議会を中心に、地域住民側と若者側の双方の交流の輪を一層広げていきながら、地域に密着した活動でつかみ取り、お互いの顔が見える支援をしていきたい。

引き続き、講座や交流会を定期的を開催することで、参加者同士の関係を深めつつ、一人暮らしの高齢者の会の立上げをサポートし、更には、障害者、介護者家族、子育て中の親といった生活課題を抱える当事者同士の組織化支援を目指していきたいとのことです。

災害にも強いまちづくり みんなで支える要援護者支援

助成年度	平成22年度
助成金額	50,000円

[地域の概要（北区大宮学区）]

地区人口	16,826人
地区世帯	7,602世帯

<数値は平成22年国勢調査結果による>

地域の状況

大宮学区は、北区で最も大きな学区で（面積（北部山間地域除く）、人口、世帯数）、人口が年々増加するとともに、高齢化の進展により、独居高齢者をはじめとした高齢者数も増えていきます。また、昔ながらの住民と新しい住民・学生が多い地域ですが、総世帯数約7,600のうち、町内会に所属する世帯が約3,700、市民しんぶん配布世帯（自治会等で世帯確認ができていないもの）が5,100であることが示すように、地域内のつながり合いが薄れつつある状況です。

活動のきっかけ・目的

地域住民同士が気兼ねなく協力し合えるような「土壌づくり」が必要であり、そのためには、さまざまな住民が参加することができるような地域福祉活動が大切ではないか、そうした思いから大宮社会福祉協議会が中心となって、住民同士の協議力をつけるとともに、地域の強いネットワークを作ることを目的として、当事業が立ち上がりました。

活動内容

当学区においても高齢化や高齢に伴う独居世帯などが増加する中、みんなで支える要援護者支援の観点から、防災を切り口に、地域住民が気兼ねなく協力することを目指しています。

具体的には、住民が主体となって、「地域のお宝さがし」と題し、地域の資源（災害時に役立つ資源。例えば、消火栓、防火水槽、掲示板、防災用品保管倉庫、その他、福祉施設や病院等）の存在を話し合い、確認する、また「地域の課

題さがし」と題し、地域の課題（日常及び災害時）を話し合うなどの取組を行います。

また、確認した「資源」を実際に目で見るため、「まち歩きワークショップ」を実施し、ブロック内を歩きながら調査・確認した資源をマップに落とし込みます（資源マップ）。

そして、学区内を8つのブロックに分け、8つのグループごとに、最終的なマップに仕上げ、学区内の各戸へ配布しました。



まち歩きワークショップ

活動において工夫していること

一部の数名の関係者だけでマップを作成するのではなく、多くの方々が意見を出し合い、実地調査をした結果を基に、自分たちで作成したマップだ、という誇りを持つ作成手法を取りました。

また、マップだけでは味気なく、どこかにしまい込んだりしてしまう、との意見から、皆で検討し、マップにカレンダーを別途付け加え、常に目の届くところに備え付けてもらえる工夫もしました。

平成23年に作成したマップは、1回限りで完了させるのではなく、取組を継続させ、2年目以降も各団体の役員が普段から地域の防災資源等を確認し、新たに気付いたことを随時提起してもらい、マップに追加していき、4、5年かけて完成させる予定です。このように時間をかけて作業をすることで、マップの内容をより充実させるようにしています。

事例②



講演会

活動の特徴

当団体の取組には、佛教大学の講師である、専門家（地域福祉・防災福祉専門）がアドバイザー的な役割で継続的に関わっています。住民の話し合いだけでは足りないところ、あるいは話し合いを適切な方向へ導くため、こうした専門家のフォローは大変重要で、取組をより意義深いものにできています。

また、学区が大きいことは住民全体がまとまりにくいというデメリットがある反面、規模が大きいため、大勢の参加者に来てもらえる良い機会でもあり、多様な意見の発表が期待でき、他の学区にはない独自性や特色ある学区づくりに生かせる、という強みにもなっています。



グループ（フロック）ごとの話し合い

活動から学べること

マップづくりは成果物としてのマップだけではなく、完成までの作業過程が重要です。自主防災会だけなど、単一の団体だけに限定せず、地域の関係団体の連合体で活動するとともに、住民同士でじっくりと話し合い、自分たちの地域をよく調べ、見つめ直すこと、更にその中で

住民同士の絆ができること、これら一連の過程が全て大切です。このことはマップづくりだけではなく、今後、他の様々な課題に対しても、今回構築した関係性を軸に、すぐに話し合える基盤が整ったと考えられます。

特に、「防災・減災」は住民の皆が関係するテーマであり、参加の呼び掛けを行いやすいといえます。

また、各グループに学生が分散して話しに加わっており、その存在は場の空気を和らげるとともに、学生にとっても多くの住民の意見を聞き、勉強になるもので、双方に良い関係が生まれていました。こうした地域ぐるみでの取組は、地域の総合力、福祉力を高めるためにも重要なことだと思われれます。



グループ（フロック）ごとの発表

参加者の声

「今まで地域の知らなかったことを知ることができた。それだけでもこの取組に参加した意義がありました。」

活動の成果

1年間の講座を通して学区の防災と福祉に対する意識が徐々に高まり、講座への参加者も増えました。活動の成果物としては、「資源マップ」を作成し、全戸に配布することができました。

今後の方向性・目標

ほとんどの町内会長や自主防災委員が年に一度交代する輪番制であるため、地域の中でのリーダー育成が必要になっており、今後はまず、任期が2年以上になるように自主防災会を軸に規約を改正するなど、在り方を検討し、地域に根ざした活動を目指していきたいとのことです。

紫竹安心安全・地域福祉活動推進委員会

紫竹学区安心安全・地域福祉活動推進事業

助成年度	平成21年度
助成金額	150,000円

[地域の概要（北区紫竹学区）]

地区人口	6,804人
地区世帯	3,362世帯

<数値は平成22年国勢調査結果による>

地域の状況

紫竹学区は、堀川通りや北山通りを中心に住宅街が広がる地域で、学区民が一堂に集まる「紫竹まつり」、定年後の共通の趣味を通して地域の交流を深める「紫竹ローマンクラブ」といった開かれた地域活動が行われるなど、各種団体による福祉のまちづくりを目指した活動が進められています。

活動のきっかけ・目的

平成20年度に、各町内から1名を選出した町会連合会で当委員会を設立しました。また、地域福祉推進の要素も盛り込むため、自治連合会、各種団体も加わり、委員会の体制を強化しました。



意見交換会

活動内容

地域福祉を推進するために、自治連合会のほか、学区民生児童委員協議会や学区社会福祉協議会などの各種団体を中心となり、「紫竹安心安全・地域福祉活動推進委員会」を設置し、町内会や各種団体の連携をより一層強化するとともに、地域の安心安全・地域福祉推進のまちづくりを実践しています。

<具体的な取組>

(1) 安心安全・地域福祉推進のまちづくりを考える意見交換会

地域の課題や社会資源、文化遺産などをツールに意見交換を行い、福祉を基盤とした今後のまちづくりを考える場（地域住民で地域のことを考える場）と位置付けています。

(2) 安心安全パトロール

かねてからパトロールを実施していますが、認知症などの要援護者の見守りなども踏まえて実施することを検討しています。

(3) 安全マップの作成

地域福祉を含め幅広い分野での安心安全についての調査を行い、目に見える危険な範囲や問題点を表示し、地域住民に対して啓発します。

(4) 食の安心安全と体力の維持管理講習会

安全な食物と体力の維持管理の講習により、身体の内と外から安心安全を考えます。

◎活動の流れ（安心安全・地域福祉推進のまちづくりを考える意見交換会）

19:00～学区在住の大学教員からの講演（紫竹のまちづくり）
19:55～意見交換会
20:40 終了



食の安心安全講習会

活動において工夫していること

自治連合会だけの集まりとせず、福祉の関係団体を交え、「地域福祉」の観点を踏まえた地域組織として設置していること、また自治会長は1年で交代することが多いものの、新任の自治会長へのフォローとして「地域福祉」の基礎を学ぶ機会を提供していることが工夫点として挙げられます。内容についても、紫竹のまちづくりを考える基本的な枠組みとして、地域社会のモデルの説明と、地域でのまちづくりが抱える全国共通の課題等の話題提供があり、紫竹学区の在り方を考えるうえで参考となるものでした。加えて、当委員会の下には福祉部会が設置されており、意見交換会とは別個に福祉の勉強会や事例等の情報を交換しています。

また、学区内の自治会総会としてではなく、「意見交換会」という肩のこらない場を作ることにより、参加者（各町自治会長）から忌憚のない意見を引き出せていました。

さらに、行政（福祉事務所長）の参加を求めることで、行政との距離を縮め、自治連合会と行政の関係性を地域に見えやすくしています。

活動の特徴、活動から学べること

各種団体や自治連合会が実施する事業という位置付けではなく、委員会組織にしていることから、各団体が横断的にまちづくりを考え、活動できる場が作り出されていることが特徴的です。実際、意見交換では各町内会が抱える課題、課題を出し合い、話し合う場になっています。

また、学区内に在住しているまちづくりに協力的な福祉の専門家（大学教員）との良い関係が築けており、アドバイザー的な立場と、地域住民としての立場の両面から意見を出せる方の存在は、地域の大きな力となっています。

自らの地域の課題を考え、どうしていきたいか、といったことを考える場としての学区単位での推進委員会の設置は、各種団体の連携や調整が進みやすく、有効な仕組みとして参考になるものです。

地域にはいろいろな才能を持った人材が埋もれている可能性が十分にあります。特に地域のために貢献できる能力を持ち合わせた方もおられ、そうした方を地域で発掘し、地域福祉活動に巻き込んでいけるようなアプローチも大切です。

活動における成果

地域力の強化、情報交換の場づくり、地域の活性化が実現できました。

今後の方向性・目標

少しずつ委員会に参加する人数を増やし、各人に負担がかからないようにしたい。

また、継続することが大切なので、次世代を担う年代の参加者を少しでも多く集めていきたいとのことです。

二条城北小学校運営協議会・PTA

子ども110番のいえラリー ～地域ぐるみで子どもを見守ります～

助成年度	平成18年度
助成金額	25,000円 (助成団体は、上京区待賢住民福祉連合協議会)

[地域の概要]

地区人口	3,913人(待賢学区) 8,493人(出水学区)
地区世帯	2,084世帯(待賢学区) 4,204世帯(出水学区)

<数値は平成22年国勢調査結果による>

地域の状況

上京区では、学区単位での地域活動がしっかりと根付いており、充実した活動を展開しています。例えば、地藏盆や区民運動会などは、子どもから高齢者まで一緒になって楽しむことのできる行事として、各学区、町内で今なお大切に引き継がれています。

しかし、少子高齢化の進展による地域活動の担い手の減少や、単身者やマンション居住者が増加する中で、地域活動への参加が減り、これまでの地域活動の維持が困難になりつつあります。

活動のきっかけ・目的

15年ほど前から、子ども110いえの家が設置されていましたが、実際に子どもが訪れることは稀で、必ずしも認知度は高くない状況がありました。このままでは、万一の際、実効性が発揮できないことを待賢住民福祉連合協議会が危惧したことから、子どもたちが実際に110番の家へ行き、場所を覚えてもらうようにと、ゲーム感覚の行事を企画したことが始まりです。

活動内容

高学年の子どもたちは、自分たちでグループになって、低学年の子どもたちは、高学年生徒か保護者と一緒に小学校区域内(待賢、出水学区)の110番のいえを20箇所回り、台紙に各所でシールを貼ってもらいます。

20箇所回ったら学校へ戻り、参加賞(コップやノート。主に100円均一で買えるもの)を受け取ります。ラッキーポイントも設けてあり、お菓子やお土産などを用意してゲーム性を高める工夫をされています。この受付で子どもがきちんと戻ってきたことを確認します。



スタンプラリーの説明

スタート時の趣旨説明の際に、「シールを集めたら必ず学校に戻ってくる。また、シールが集まっていなくても、体調不良時や時間が経過したら学校に戻ってくるように」との説明をされていました。20回の訪問のうち、必ず1回は自らの町内の110番のいえを訪問すること、というルールも定めています。



スタンプラリーの様子①

事例④

活動において工夫していること

シンプルなアイデアですが、「子ども110番のいえ」という地域で埋もれがちな社会資源を使い、子どもたちが楽しみながら、各家を回ることで、子どもと地域の大人が交流する場が創り出されています。小学校と児童だけの取組とせず、地域を巻き込んだ活動であることから、保護者同士、子ども同士、そこに地域のおじさん、おばさん（子ども見守り隊 50 名を含む）が間に入ることで、地域が仲良くなれる仕組みができるとともに、地域住民が主体性を発揮し、地域づくりの主役であるという意識付け、動機付けとして実施することができています。



スタンプラリーの様子②

活動の特徴、活動から学べること

当初は、待賢小学校区で実施していましたが、待賢小学校と出水小学校が「二条城北小学校」に統合されたため、両学区での実施を検討したものの、元学区が統合された小学校区では、両元学区が協力し交流する場づくりに当たっての調整に難しさがあり、実現に至らない状況が続いていました。

そこで、二条城北小学校運営協議会とPTAが実施主体として、元学区である待賢と出水のつなぎ調整役となることにより、平成22年度からは両学区合同で実施できるようになりました。そのことにより、二つの元学区の住民福祉連合協議会と各種団体が緊密に協力し合う活動が実現しています。

また、活動の運営に小学校の多くの教職員も自主的に参加されています。活動中の子どもの安全監視等にも交通安全や少年補導等、学区各

種団体や子ども見守り隊のメンバーが協力するなど、多くの地域の大人が参加しています。

活動における成果

110番のいえとして指定されているところは、地域との関係、しがらみの中で引き受けているというケースもあり、目的意識が薄くなりがちでしたが、この活動を通じて目的を再確認できたことは大きな成果です。



集まったスタンプ

今後の方向性・目標

110番のいえを子どもにしっかりと認識してもらうために、またいざというときに飛び込めやすいように、普段から関係を作っていく一環として取り組むことは、有意義であり、多額の経費もかからないことから、同様の活動が全市的に広がっていくことが期待されます。



「子ども110番のいえ」って何？



「子ども110番のいえ」は、児童等の年少者が不審者などに声を掛けられるなどして身に危険を感じたときに、地域住民の自主的な協力の下でこれを保護するとともに、警察等へ通報を行う緊急避難場所を確保するため、通学路や児童公園の周辺に設置されたものです。

日本語を母語としない家族の子育て支援

～地域・人とのつながりから、視野を広げて子育てを楽しもう～

助成年度	平成23年度
助成金額	150,000円

[地域の概要 (左京区)]

地区人口	168,802人
地区世帯	82,067世帯

<数値は平成22年国勢調査結果による>

地域の状況

左京区における外国人登録の状況は、平成22年12月末時点で、109箇国、約6,000人(市全体では、約41,000人)であり、支援が必要な外国籍世帯は、他の区と比較しても多い状況です。

活動のきっかけ・目的

ある子育て中の母親が、外国から来た日本語を話さない1人のママ友達のために地域のサービスや子育て情報をメールで伝えていたことが当団体設立のきっかけです。日本語を話さない家族は、様々な不便や不安を抱えながらも、言葉の壁から情報が届かないため、地域と距離を置く傾向にあります。このため、子育て家族に平等に情報が行き届き、一緒に子育てを応援したい、という気持ちから平成22年5月に当団体が発足しました。

また、多文化や外国語への関心が高い日本人家族が多いものの、外国人家族と話すきっかけをなかなかつかめない現状があります。そこで、国籍を問わず、子育て中の家族なら誰もが感じる孤立感、閉塞感、不安感を解消する場、「多言語子育てひろば」(以下、「ひろば」)を平成23年2月から設けることとしました。

活動内容

世界と日本の子育てについて、広い視野で考えるきっかけを作る「ひろば」を毎月開催しています。「ひろば」では、日本語や外国語の絵本の読み聞かせや歌、世界のダンス体験をするほか、参加者が地図に書き込みながらの「地域子育て情報マップ」(育児中の家族が行きやすい

お店や、公園、医療機関に関する情報を集約)の作成を行ったりします。

また、「仕事と家庭」、「世界の出産」、「世界の離乳食」、「子育てしながらの外国語学習」といった情報交換の時間を通し、身近な「子育て」という共通事項をきっかけに、お互いの話を耳を傾けながら、子育て中はどうしても狭くなりがち視野を広げるきっかけを作っています。



多言語で1～10を数えてみる

活動の特徴、活動から学べること

社会資源(ほっこりはあと出町)を積極的に活用して、会場費の負担を軽減するとともに、広いスペースで多くの人が集えるようにしています。活動当初、「ひろば」の参加者は20人前後でしたが、ホームページを中心としつつ、スタッフがチラシを持ち歩き、児童館、保育園、公園、スーパー、あるいは、お散歩中の子どもがいる外国人を中心に声を掛けて参加者を募るなど、地道な広報活動も行うことによって、回を重ねるごとに来場者が増えています。最近の参加者の多くは、口コミによりこの集まりを知ったとのことで、人から人へと徐々に認知度が高まっています。

他の子育て関連団体(左京子ども支援センター、京都国際交流会館等)とも連携をとりながら活動をしています。「つどいの広場」(京都市子育て支援活動いきいきセンター)とは、広報のほか、施設の利用などで協力しています。

事例⑤

活動で工夫していること

初めての人や、日本語や英語が分からない人も、参加者がリラックスして気軽に会を楽しめるよう、始めに歌を歌ったり、体を動かしたりして会を始めています。また、お互いが話し始めるきっかけになるテーマを用意しています。日本語や英語でプログラムを進行しますが、参加者の母語（中国語、アムハラ語、インドネシア語、フランス語、スペイン語）など、様々な地域の言葉で1から10までの数を数えてみたり、中国、韓国、フランス語の絵本を読み聞かせたりして、話題にする地域が偏らないように配慮しています。

内容と共に、親同士のコミュニティ空間も大切にしています。子どもが自由に遊んでいる間に落ち着いて会話をしてもらい、情報交換と同時にストレスも解消してもらえよう、活動内容を組み立て、開催場所も選ばれています。例えば、子どもが泣いたりして輪に入れない人がいるときは、みんなであやします。さらに、会場が和室なので、席を固定せず、活動中に自由に動けるようにするなど、「ひろば」の最中でも出入りがしやすい環境づくりを心がけています。

地域の課題、ニーズを把握する方法

参加者に声を掛けることで、困っていることや分からないことを一緒に解決していくようにするとともに、参加者からの問い合わせのほか、多文化共生関連の研修に参加するなどして、社会全体の課題の把握に努めています。それを踏まえて具体的に、ホームページに必要な案内を英語でアップしたり、冊子を作成したりすることにより、情報の共有を図っています。これまでは、予防接種、育児用品を購入できる場所、幼稚園の補助制度、保育園・幼稚園の入園についてなど、様々な子育てに関する問い合わせがありました。

活動における成果

毎回「ひろば」には、30名～60名の多数の参加者があり、開始以来、15箇国以上の国籍を有する家族が参加されました。

日本人家族にとっては、外国での出産、子育て環境について学ぶことができ、子ども達も親も様々な「価値観」を学ぶ楽しさを知ることができました。参加者からは「多文化や外国語に興味があるが、子供が通っている幼稚園、地域、子育て中の主婦としての生活範囲の中で日本以

外の文化や人に触れる機会がほとんどないので、嬉しい。」といった声も寄せられています。

一方、日本語を母語としない家族にとって、「ひろば」は、地域とのつながりを実感できる場であると同時に、日本の生活習慣や文化、日本語日常会話を学ぶ場でもあります。また、「ひろば」を通じて、母語を話す家族同士（中国語、英語等を話す家族）が知り合いになることで、外国人が自分の母語で情報交換や会話をすることができ、孤立感や不安感を解消する機会にもなっています。

当初は、日本語を母語とする親と他言語を母語とする親同士の交流を図ろうとされていましたが、実際には、母語が同じ親同士がコミュニケーションをとる場面が多く見られるようになりました。このように、日本語を話さない子育て家族を応援する活動を通じて、地域社会のつながりを創り出しています。



外国語での絵本の読み聞かせ

今後の方向性・目標

「ひろば」で話し合われた内容、外国人が知りたい子育て情報、子育てに必要な日本語の表現、または外国での子育てについて、感じることをまとめたい。ウェブ上や冊子配布により、公開する予定とのことです。これは、多文化共生社会の中で、貴重な資料となり得ます。また、Jaforeでは、「多言語子育て情報サイト」(<http://kyoto-playground.blogspot.com/>)を通し、最新の子育て情報を英語（自動翻訳機能を使って、英語も含め50種類以上の言語に対応）で常に発信していますが、情報サイトの継続はもちろんのこと、他の地域にも広がるように、積み重ねた経験を「多言語子育て情報提供サイト運営実践講座」のような形で開講したいとのことです。

NPO法人 音の風

スマイルミュージックフェスティバル

助成年度	平成19年度
助成金額	200,000円

活動のきっかけ・目的

NPO法人「音の風」が障害者福祉施設や障害のある方と共に音楽活動に取り組む中で、施設職員やご家族、また当事者から音楽活動を発表する場がほしい、との要望を受けていたことや、東山区社会福祉協議会が障害福祉の分野で当団体との連携を模索していたことから活動を開始しました。

事業概要

地域で暮らす障害のある方にとって、充実した余暇を過ごし、自己実現を図るためのメニューや活動先を創り出すため、当事業を実施しています。また、地域の中で障害の有無に関わらず、音楽を通じて交流を図ることで、地域全体における障害への理解を深め、全ての方が暮らしやすい地域社会の実現を目指しています。

具体的には、毎年1回、「スマイルミュージックフェスティバル」と題し、区内の障害団体・施設が活動団体を組織して、演奏や合唱を披露します（事業訪問時は6団体）。事前に市民しんぶんなどで広報し、一般の来場者も募っています。

また、地域に対してアプローチするために、地域の夏祭りなどにスマイルミュージックフェスティバルの参加団体が加わり、意識的な交流を行っています。

その他、広報誌「スマイル通信」を発行し、スマイルミュージックフェスティバル参加団体の練習風景や本番で実施された内容の報告などを区内に回覧方式で配布しています。このように、障害のある方々の社会参加の状況を地域へ積極的に発信しています。



来場者プレゼント

活動において工夫していること

練習の仕方や順番、振り付けをどうするかなど、講師が一方的に決めるのではなく、障害がある演奏者と逐一相談しながら決めるようにしています。

また、スマイルミュージックフェスティバル当日は、「スマイル」をテーマに子どもたちに絵を描いてもらい、会場に飾り付けるとともに、コンクールを開催して表彰式を行いました（表彰を受けたのは、3歳から小学校4年生までの計6人）。絵を描いた子の親の来場もあり、このような手法で意識的に多くの方に参加してもらう工夫をされています。



絵画コンクール

事例⑥

活動の特徴

当団体は、音楽の専門性を持っていて、音楽好きな方が比較的多い障害がある方々へのアプローチや生きがいづくりに成功しています。披露する内容は、障害の程度にもよりますが、演奏者は練習段階から本格的に取り組み、当日きっちりとした演奏ができるようにと真剣そのものでした。こうした練習ができること、会場も区役所総合庁舎を借りられていることや、区社協とも協力できていることは強みになっています。

さらに、平成23年で4回目の開催を迎え、既に地域に定着していることから、毎年、この発表会を楽しみにしている方が多くおられます。



和太鼓いちばん星

活動から学べること

スマイルミュージックフェスティバルと絵画コンクールを同時に開催したり、地域の行事に参加するなど、積極的な地域交流・地域参加を実施することで、障害の啓発と障害のある方々の生きがいの創出の両方がかなえられています。障害団体としては積極的に地域に出向くこと、地域としてはそうした団体を受け入れ、共に住み良い地域づくりを目指すことが重要なポイントです。

活動を長く続けるためのコツ

第1回の開催では、理想をすべて実現しようと、団体の力量以上の動きをしたために、各組織や関係者が疲れ果て、次回開催へ向けての意欲が失われてしまいました。そこで、長く続けるためには、できる範囲で実施することが大切だと気付きました。

また、毎年の反省点を次年度にすべて改善するのではなく、1つでも改善ができれば良いと思うくらいのスタンスで取り組むことによって参加者全員の気持ちが楽になっています。



スマイルプロジェクト

課題や苦労されていることは

出演希望が多く、イベントの時間が長時間になってしまうことが課題です。1年に1回で、楽しみながら出演していただく以上、2~3曲は演奏してほしいため、削る部分がなく、困っているとのこと。一方で、費用的にも人材的にも2日間にわたる開催とすることもできず、出演希望を断らざるを得ないことを残念に思われています。

活動における成果

常に1年後の出演を目標にして練習に励むことができ、また演奏会を楽しみにされている施設やグループが多く、障害のある方々の生き生きとした生活の実現に貢献できていることが成果です。

今後の方向性・目標

財源の確保や人的サポートの充実など、総合的に安定した運営を目指して運営基盤の強化を進めることが急務ですが、しばらくは作り上げてきたことの中身を充実させていきたいとのこと。

また、今後の夢としては、現在、東山区を中心に取り組んでいるこの活動が、他の市域でも実施されるような流れになればうれしいとのこと。

さくら（会食のつどい）

会食のつどいと地域サロン（居場所づくり）

～地域住民による食事会を通じてお年寄りの孤立を防ぎます～

助成年度	平成23年度
助成金額	150,000円

する高齢者の自宅にお弁当を届ける配食も実施しています。

[地域の概要（東山区）]

地区人口	40,528人
地区世帯	21,114世帯

<数値は、平成22年国勢調査結果による>

地域の状況

東山区の老年人口（65歳以上）は約1万2千人であり、全人口のうち、3人に1人が高齢者で、その比率は年々増加しており、京都市平均を大きく上回る急速な高齢化が進んでいます。



ボランティアによる食事づくり
(メニューはちらし寿司、かぼちゃのたいたん)

活動のきっかけ・目的

東山を良くするフォーラム参加を契機に行われた地域調査の結果、ボランティアとして関わられること、ボランティアにしてほしいこと、手助けが必要なことは、「食事づくり」という回答が最も多かったことから、ニーズがある「食事づくり」と「配食」をしようということになりました。しかし、単に配食をするだけではなく、一人で食事を摂る地域の高齢者を対象に、「安心・安全で旬のおいしさを」の心を大切にしたいと、ボランティアが協力し合い、食事づくりを行い、共に会食をしながら、交流する場の提供や季節ごとの催しを通じ、住み慣れた地域での居場所づくりを中心に据えた、地域密着型の活動を始めることとしました。

月1回の会食では、約60名が参加し、会話の中で、日常生活における様々な相談も交えながら、支え合いの輪を広げています。また、手書きの「会食のつどいニュース」を作成・配布して、栄養指導を行ったり、会食後に筋トレ教室を開き、高齢者の身体面での健康づくりにも配慮しています。

会食のほかにも、参加者を募って、遠足に出掛けたり、コスモスの会（絵手紙ボランティアの会）と提携し、うちわづくりの講習会、絵手紙講習会等を開き、活動の範囲を広めています。

活動内容

毎月1回、月輪中学校区（月輪小学校・一橋小学校・今熊野小学校）で、一人で食事を摂られている高齢者を対象に、栄養士や調理師を含むボランティアが季節の旬の食材を使った食事づくりを行い、ボランティアの個人宅で共に会食をする「会食のつどい」を開催し、また希望



会食の様様

事例①

活動において工夫していること

会食のつど、次回はどんなものが食べたいか声をあげてもらい、調理師と栄養士が栄養バランスや旬の食材が活かせるメニューを考え、次回の献立を決定し、食事を作る際には、一つ一つの見栄えにも注意し、食べられる方の立場に立って、できる限り手間と時間をかけるようにしています。

毎回、参加者の食事の感想や行事の感想等の集約を心がけ、次の企画に生かすようにするとともに、継続して参加されている方が欠席された時には、次回までに、翌月の参加確認を兼ね、訪問するなどして、「会食のつどいニュース」を届けています。



手作りの絵手紙とニュースを添えたお弁当

活動の特徴、活動から学べること

人が生きていくうえでの基盤となる「食」を通じて、栄養士や調理師等の専門職である地域の住民が自発的にボランティアとして参加することで、これまでに培った経験を生かしながら、食事づくりをし、会食後にはアンケートをとるなど、地道な活動を続けることにより、少しずつ、内容の充実につなげています。

また、個人宅を開放して会食を開催することで、公共施設等には足を運びにくいという高齢者にも参加してもらいやすくなっています。

さらに、一人で食事をすることが多い高齢者に呼び掛けて、配食よりも会食という形態に重点を置き、そこから多くの方と関わりを持ってもらい、孤立を防ぐとともに、家以外の地域の

居場所づくりにも結び付いています。

定期的に、介護予防の講習会やお出かけ会を企画するなど、生きがいをもってもらう取組も加え、より多くの交流の機会を設けているのも特徴的です。

活動における成果

会話を楽しみながらの会食が定着し、地域コミュニティの中での助け合いやひとりぼっちの人をつなげて、相互の親睦を深めることができました。会食後は、皆がいきいきとした笑顔で会場を後にされ、次回開催を心待ちにしているという声を多く聞くようになりました。

さらに、参加者が自分の周りの友人に声を掛けられることで、人の輪が広がるとともに、「食事づくりがしてほしい」、「食事づくりならボランティアとして関われる」という仲間が集まって、徐々に食事の数も増えてきました。

今後の方向性・目標

皆の関心があるテーマの講師を招き、講演会を年2～3回開催することを定例化していきたい。

「会食のつどい」は、毎回、60名程の参加者で定着してきているので、この規模を維持し、高齢となっても住み慣れた地域で住み続けていきたいという願いを少しでもかなえる手助けとなるよう、活動を通じて地域の交流や支え合いを広げていきたいとのことです。



筋トレ講習会

沢ネット

小地域福祉 ～町内の健全な福祉社会の実現を目指して～

助成年度	平成18年度
助成金額	70,000円

[地域の概要（山科区音羽沢町）]

地区人口	505人
地区世帯	239世帯

<数値は平成24年1月1日時点、住民基本台帳人口による>

地域の状況

音羽沢町は、山科区の中央部に位置し、昔ながらの住民が多く住む地域で、高齢化率が極めて高く（34.7% 23年4月1日時点、（京都市平均は、23.4% 23年4月1日時点））、1割以上の世帯が単身の高齢者世帯という状況ですが、住民同士の支え合いの活動が積極的に行われています。

活動のきっかけ・目的

当団体（沢ネット）は「沢町福祉ネットワーク」として、平成13年に結成された、音羽沢町の福祉団体です。町内の独自の組織で、地域に根付いた活動を推進されています。もともと自治会長をされていた代表が町内の名簿を見て、高齢者が非常に多い状況に課題があると感じたことが出発点でした。まずは、高齢者にアンケートを行い、その回答に沿って、夜回りや日常生活の介助・支援を行うようになりました。

活動内容

「できる人が」「できるときに」「できることを」「できるだけやる」。「体力に応じたことを拘束されずに、自発的にやること。」をモットーに掲げ、少子高齢化の対応策として、地域で高齢者が安心して自立できる体制づくりを主旨に、町内全体が互いに支え合いのできる地域づくりを目指しています。

具体的には、日常生活における、ちょっとした困りごと、例えば「簡単な掃除や窓ふき」、

「ゴミ出し」、「庭の草木への散水」などがあれば、協力会員を派遣し、無償で援助を行います（電球の取替えにおける新しい電球の購入費用などの実費はもらい受けます）。

これらの利用対象者は、

- (1) 介護保険の要支援・要介護者で、介護保険対象外の援助を希望する方
- (2) 行動が不自由になり、日常生活の援助希望をする方
- (3) その他援助が必要と認められた方

です。



高齢者安否訪問

なお、対象となる方への援助を行うのは、沢ネットに「協力会員」として登録されたボランティアの方々であり、前記のとおり、無償で援助を行っています。

また、町内の人々に常に防災意識を持ってもらうため、夜回りを行うとともに、皆がお互いにふれあいを深めてもらうことを目的に、食事会や茶話会を実施しています。行事に出て来られない方を含め、訪問声かけ隊を組織して、月1回以上、単身高齢者への声かけ（安否訪問）も実施しています。

事例⑧

活動において工夫していること

平成 23 年度は、団体の結成 10 周年に当たることを踏まえ、町内の方々を対象にし、「沢ネットに対する感想文」として、意見・要望・批判を募りました。結果的に、活動への感謝の思いなどが綴られた 40 通を超える感想文が集まり、地域住民の方が沢ネットに対する様々な思いがあることが浮かび上がりました。

23 年 11 月には、集まった感想文を中心にまとめ、10 周年記念誌として、町内各戸に配布し、取組を詳しく知ってもらうことにつながりました。こうした直接の利用者以外の声も含めて聞き、様々な視点・意見から得られたことを活動に反映させながら、地域の活性化に努めています。



夜回り活動

活動の特徴、活動から学べること

沢ネットは、ニーズの把握方法として、手間はかかりますが、町内からアンケートをとり、的確にニーズを把握したうえで、ニーズに沿った取組を企画・実践しています。

また、町内の独居高齢者で気になる方についての安否訪問を、ごく身近な近所のボランティアが行っており、「住み慣れた地域で安心して暮らす」一助となっています。これらの活動を学区よりも小さい町内組織で実施しており、より身近な単位での見守りが実践できています。

町内単位のため、顔も見えやすく、訪問先の方もお願いをしやすいことから、ニーズを再構築することも可能であり、かつニーズや課題をまとめることや平均化もしやすいので、より地域の必要性に沿った活動が実践できるという利点があります。

実際に、「地域の皆が仲良くなり、顔なじみになった」ことが活動の成果として挙げられ、福祉を基盤にして地域を活性化できています。これらの活動経費は、ほぼすべて町内の賛同者からの寄付でまかなっているため、地道な取組が地域に支持されていることが見受けられます。

地域の課題・ニーズを把握する方法

地域のニーズ・課題は、町内アンケートをとることと、独居高齢者の安否訪問において直接聞くことで把握しています。

また、安否訪問では、訪問の都度、困っていることなどを聞き、訪問記録として残し、守秘義務を守りながら、団体に共有しています。

本来的には、地域の皆さんが仲良くなれば、世間話や井戸端会議の中で地域の状況は分かるはずですが。その中で把握したニーズに対応できる基盤を作っておくことが大切であるとのことでした。

活動における成果

「地域の皆が仲良くなり、顔なじみになった」ことと、町内の住民に「町内には沢ネットがある」という安心感を持っていただけるようになりました。

今後の方向性・目標

高齢者の退院後の日常生活支援や、初期の認知症の方への支援が課題と考えています。こうした方もできる限り地域で生活をしていけるよう、専門機関と連携しながら、引き続き地域の協力で支えていきたいとのことです。



意見箱

高齢者サロン「リンリン」 ・ 子育てサロン「ユーユー」

助成年度

「ユーユー」平成17年度

「リンリン」平成20年度

助成金額

「ユーユー」142,900円

「リンリン」175,000円

[地域の概要（下京区有隣学区）]

地区人口 4,283人

地区世帯 2,793世帯

＜数値は平成22年国勢調査結果による＞

地域の状況

有隣学区は、近年のマンション建設の増加により、マンション居住者と従来からの居住者との交流が大きな課題となっていることから、その促進を図るために学区の各団体が連携して積極的な取組が行われています。

活動のきっかけ・目的・事業概要

高齢者サロン「リンリン」、子育てサロン「ユーユー」は、下京区有隣学区の民生児童委員協議会が実施しています。当学区はマンションが多く、総世帯数約3,000世帯のうち、マンションが約2,000世帯を占めます。マンション内では近所とのやりとりがあまりない所もあり、またオートロックが災いして地域とのつながりが薄れつつある状況です。その中で、高齢者が気軽に集える場を提供すること及びマンション住民との交流を目的として、高齢者サロンと子育てサロンの取組を開始しました。

(ユーユーの活動)

子育てサロンの開催

- ・毎月第1金曜日 10時～11時30分
- ・元有隣小学校体育館

クリスマス会など、季節に応じた取組を開催。平成21年11月から22年10月までは、5周年記念事業（お出かけ会やお茶会など）を実施しました。

(リンリンの活動)

高齢者サロンの開催

- ・毎月第3火曜日 12時～14時
- ・元有隣小学校交流ルーム

基本的には「おしゃべりの場」ですが、歌謡曲や童謡を一緒に歌ったり、地域包括支援センターや地域介護予防センターの職員から体操や健康づくりの知識を学ぶこともあります。高齢者であれば、申込みがなくても参加できる食事会「いちょう亭」（おにぎりとうどん）を正午から約1時間実施しています。



「リンリン」で歌を楽しむ

ユーユーの活動の流れ（一例）

- ・主旨説明
- ・管理栄養士からの食育講座
- ・手巻き寿司作りと食べながらのおしゃべり

リンリンの活動の流れ（一例）

- ・65歳以上の住民が参加できるランチ
- ・おしゃべりの時間（2時間程）
- ・各月ごとに音楽会、手品会、血圧測定や健康講座（地域包括支援センターによる）を実施

活動において工夫していること

ユーユーでは、クリスマス会において「手巻き寿司」が、また毎月のリンリンでは地域の製麺屋に協力を仰ぎ、「うどん」（有料）が出されています。手巻き寿司作りでは、家庭で巻寿司を作るノウハウを体験してもらうことにより、若いお母さん同士のおしゃべりが増え、携帯電話のメールアドレスを交換するなど、つながりを作る場ができていました。このように、参加者に楽しんでもらう工夫を心がけています。



巻寿司の完成品

活動の特徴、活動から学べること

両事業ともに開催から一定の年数が経過し、地域に着実に根付いていることから、開催を楽しみにしている方が多くおられます。実際に毎回の参加者が多く、盛況を博しています。

当学区の取組には、学区内に元有隣小学校という社会資源があり、活動拠点としての有効活用ができているという特徴があります。

ユーユーは、有隣学区に隣接する永松学区と合同で実施しています。実際に、1学区だけでは対象者が少ない、あるいは先進的な隣接学区と合同で活動したい、などの希望があれば打診をしてみる事が大切で、そこから活動が活性化される可能性は大いにあります。

また、福祉にとらわれない、いろいろな団体にも協力を仰いでいます。企業や学校も地域との連携や地域貢献に熱心なところもあり、アプローチしてみる価値があります。

さらに、平成23年3月にはユーユーの活動の中で、市消防局の協力の下、「乳幼児対象の防災訓練」を実施し、災害時の状況や対応の知識を持ってもらうとともに、応急手当等を実践することにより、地域にニーズはあるものの、見過ごされやすい取組を行うことができました。

課題や苦勞されていること

リンリン・ユーユーともに、参加者が固定化されてきているということです。とりわけ、リンリンでは、身体的・精神的な面から、サロンまで出てこられない方への支援が課題です。

また、ユーユーではマンションの若い世帯への働き掛けが必要ですが、自治会に加入していないなどの理由で、回覧が回せないことから、思うように周知が進んでいません。しかしながら、その中でも、クチコミで活動を知り、参加される方は多くおられます。

活動における成果

(ユーユー)

子育てをする親同士のふれあいで、仲間づくりが進み、情報の交換や悩みの相談ができるようになっていきました。地域で希薄化している「つながり」が持てるようになり、親の孤独感が緩和され、子どもの健全育成に結び付いています。

特に、同年齢の子ども同士の学び合いによる成長が顕著に見受けられます（例えば、ハイハイしている子が、歩いている同年齢の子を見ると、翌月には歩いている、というケースがあります）。

参加者へアンケートをとったところ、毎週でも実施してほしいという声が多数あったということです。

(リンリン)

高齢者が顔なじみになり、地域の中でもコミュニケーションがとれるようになりました。また、地域包括支援センターとの連携もうまくいっており、必要な支援を速やかに実施できる基盤ができてきました。



「ユーユー」のクリスマス会

活動を長く続けるためのコツ

スタッフの意気込みが強く、皆さんがこの活動にやりがいを感じていることが大きな要素として挙げられます。

また、スタッフ個々人は、あくまで活動に対する「協力」を行って、仕事や家庭を最優先にし、無理のない範囲で活動に従事することを基本としています。

さらに、「地域にこういった方がいる、こういった団体がある」といった話を聞くと、協力してもらえるかどうか、声をかける努力をしています。常にそういった話が入るようにアンテナを張ることも地域の人材の発掘の仕方や連携する団体へのアプローチとして有効です。



乳幼児対象の防災訓練

今後の方向性・目標

町会長など、地域の役員が1年で交代でしてしまうため、責任感や意識が乏しくなってしまう恐れがあるものの、本来的に町会長など地域の役員は、町を代表し、地域の事情を把握しておく必要があります。そのために、高齢者の安否確認の訪問をリンリンと一緒にするなど、常に町会長などの地域の役員を巻き込みつつ、活動していきたいとのことです。

京都南この本だいすきの会

ママ・パパ・プレパパ・プレママのためのワクワク子育て講座

助成年度	平成20年度
助成金額	200,000円

[地域の概要（南区久世学区）]

地区人口	8,770人
地区世帯	21,146世帯

<数値は平成22年国勢調査結果による>

地域の状況

久世学区は、人口が2万人を超える大きな学区であり、乳幼児や若年層の割合が多いのが特徴です。地理的には桂川が学区内を分断する形で通り、学区内の行き来が不便な面もありますが、安心して子育てができる地域づくりに向けた活動が行われています。

活動のきっかけ・目的

地域や学校での読書活動がほとんど行われておらず、学区に図書館や文庫（地域家庭文庫）もない中、何とか地域の子どもたちに本の楽しさを伝えたいということで、本好き、子ども好きの母親が集まり、平成10年に当会が発足しました。

主な活動として、親子に絵本の読みがたりを行っていましたが、活動地域には子育てサロンや広場はあるものの、親同士をつなぐコーディネーターがおらず、集う場所があっても親が孤立感を持っていたり、遠くのサークルを探す姿も見られました。さらに、子育て情報も少なかったことから、地域の状況を改善したいと思い、団体として、子育てに関する講座を実施するようになりました。

事業概要

久世学区をはじめ、南区を中心として、主にマタニティ・0歳～2歳児親子や、子育て支援者・保護者等の大人を対象に、読みがたりやわらわらうた等により、親子で触れ合う「びよびよ文庫」を開くほか、市内外の児童館や小児科医院にも「出前文庫」として出向く活動をしてい

ます。また、児童文学作家や絵本作家を招いた講演会も開催しています。

当会では、絵本で子育てをする楽しさや、大人になっても楽しめる要素がたくさん詰まっており、絵本が子どもの想像力、言葉、親子の絆を育てるうえで、とても重要な役割を果たすという考えの下、月1回の例会で、絵本作家や絵本のタイトルを決めて読み合ったり、昔話の研究をするなど、いかにすれば子どもたちに絵本の楽しさを伝えられるかを皆で相談しています。

現在は、絵本の読みがたりの活動が中心となっていますが、子育てサークルと協働して引き続き、乳幼児の保護者を対象にし、育児に必要な情報を得るとともに、親自身が元気になるような様々な講座（子どもの事故の応急手当講習会、ハンドリラクゼーション、産後のセルフケアエクササイズ等）を企画・実施することで、子育て仲間とつながり、楽しい子育てにつなげてもらっています。



親子で楽しむわらわらうたとおはなしの世界

活動において工夫していること

子どもの年齢や開催場所等に応じて、実施内容を考え、子どもがいても楽しめる、自分にもできるとしてもらえようように企画し、講師を招いて講座を行っています。

先輩ママでもあるスタッフが若い母親と一緒におしゃべりをするすることで、安心してもらった

り、不安の解消に役立てられるような時間を確保しています。

活動の特徴、活動から学べること

スタッフも主婦であるため、無理のない範囲での内容にするとともに、子育て中の母親のための取組ではあるけれども、自分のため、自分の子どものためでもあることを常に意識しながら、一緒に楽しんでいくことが息の長い活動につながっています。

すなわち、「子どもの場でありお母さんの場でもある」と、活動を通して感じてもらうようにしています。お母さん同士を結び付ける場所で、友達の輪を広げて行ける、その一つの出会いの場になるよう、企画の立案も、参加者を巻き込んで、いろいろな意見を取り込みながら行うようにしています。

また、公民館や児童館、南区子育て支援ルーム「すくすくみなみ（※1）」等の社会資源を活用しながら、地域に身近なところで活動を行うことにより、気軽に参加してもらえ環境を整え、またスタッフが子どもを見守ることで、講座であっても親が安心して受けられるように配慮をしています。

さらに、幅広い子育て関係のネットワークを持っているのも強みです。南区社会福祉協議会、NPO法人京都子育てネットワーク、南区子ども問題連絡会（※2）等の数多くの関係団体に登録、所属するなど、横の連携をとり、子育てに関連する情報や課題を積極的に把握するようにしています。



子どもの事故の応急手当て講習会

活動における成果

スタッフ自身が自信を持って活動し、スキルアップしながら、社会貢献をしていけるようになってきています。

また、若い親や小さい子供のいる親子が近くで安心していられる場ができたとともに、子育て仲間ができ、積極的に人と関われるようになりました。若いお母さんたちもアイデアを出したり、企画に参加することで、楽しく活動ができています。

今後の方向性・目標

催しや講座等に出て来られない家庭の方が、まだまだ多いので、情報提供の仕方を工夫し、いかに最初の一步を踏み出せるお手伝いができるかを引き続き考えていきたい。

参加される方に楽しんでいただき、元気になってもらうことにより、今度は、その方々から、口コミ等で情報が発信され、子育て家庭が孤立しないようにしていきたい。

親子のコミュニケーション、親同士、子ども同士のコミュニケーションがうまくとれるような内容を考え、企画していきたいとのことです。

（※1）南区子育て支援ルーム「すくすくみなみ」
南区子ども問題連絡会、南区社会福祉協議会、南区役所が「親子で気軽に行けて、親子でほっと安心できる場所」を目指して、平成17年12月に京都市健康増進センター「ヘルスピア21」2階に開設したもので、子育て支援ボランティアと子育てサークルのスタッフ、市立保育所の保育士グループ等が運営を担っている。利用対象は、南区在住で子育て中の方。

（※2）南区子ども問題連絡会
南区の児童問題に関わる関係機関・団体等で構成されていて、児童虐待はもとより、子育てなど、広く児童問題に関する活動を推進し、関係機関の連携と、問題解決のためのネットワーク構築を目的としている。

京北にここに・わくわくネットワーク協議会

京北にここに・わくわくネットワーク事業

～地域の幅広い支援の輪による子育て世帯や高齢者のふれあいづくり～

助成年度 平成23年度

助成金額 100,000円

〔地域の概要（右京区京北地域）〕

地区人口 5,633人

地区世帯 2,052世帯

＜数値は平成22年国勢調査結果による＞

地域の状況

京北地域は、右京区の北部に位置し、丹波高原の中にあつて、急しゅんな山々に囲まれた地域ですが、住民の生活は、主として、桂川及びその支流等を開けた平野部を中心に、散在する集落で営まれています。地域の93%を森林が占め、全国的に有名な林業地でもあります。しかしながら、後継者不足、高齢化の進行（65歳以上の比率は35.1%：住民基本台帳の年齢別人口（24年1月1日現在）による）や若年層の人口流出によって、過疎化が進んでいるという課題を抱えています。

活動のきっかけ・目的

子どもの出生が少なく、近所に相談及び遊び相手がないなど、子育て真っ最中のお母さんの不安要素が拡大していたことに加え、広大な地域に集落が点在していることから、親同士、子ども同士の日常的なつながりが少ない状況がありました。また、児童館といった交流施設もない中、子育て世代が集い、悩みや不安を解消し、支え合おうという目的で、母親が中心となった自主グループが立ち上げられました。

こうした共助活動に対して、京北地域全体で支援しようと、右京区社会福祉協議会京北事務所（略称、社協）民生児童委員協議会（略称、民協）、保育所等の京北地域の関係機関・団体で構成された「京北わくわく子育てネットワーク」が平成18年4月に発足しました。同ネットワークでは、子育ての相談に応じるほか、学習会・交流会の開催や子育てサークルの支援を続けてきました。



高齢者リフレッシュ事業

さらに、著しい高齢化と公共交通機関が少なく、地域内における交流がなくなりつつあるという地域状況が顕在化してきたため、世代を超えた地域コミュニケーションの場を創り、大勢の住民の方に集まってもらうことにより、子育て世帯や高齢者の孤立を防ぎ、住民同士のつながりを育むことを目的に、「京北にここに広場運営協議会」が社協、地域包括支援センター、自治振興会、民協、わくわく子育てネットワーク等からの構成で、平成19年8月に設立されました。同協議会では、京北合同庁舎内に「ここに広場」を開設し、子どもや高齢者が気軽に集える場を運営するとともに、福祉団体と連携して高齢者の筋トレ等でリフレッシュしてもらう事業を実施してきました。

こうした二つの子育て支援、高齢者の孤立防止に取り組む団体が別々に企画・運営する状態であったものを一体となって活動することにより、両者の良い点を補完し合いながら、活動を広げていけるのではないかという発想から、2団体を統合させ、「京北にここに・わくわくネットワーク協議会」が平成22年4月に発足しました。

活動内容

各種構成団体のボランティアによる運営で、子育て支援や高齢者支援の二つの事業を柱にした活動を行っています。具体的には、子育てや高齢者福祉をテーマにした学習会や講演会の実施、毎週2回、京北合同庁舎内に「にこにこ広場」を開設し、親子のふれあいや、遊び場を提供する子育て支援活動、各地区を巡回して、高齢者への筋トレ講習や健康相談等に応じる高齢者リフレッシュ事業等を行い、住民同士の豊かな人間関係を育み、地域に愛着をもって生活してもらえる企画を立て、活動をしています。

また、当ネットワーク協議会では、京北地域の福祉・健康に関する情報やイベント報告を一元化した広報誌「にこわくだより」を毎月発行し、自治振興会を通じて、全戸に配布されています。広報誌には、カレンダーを掲載して、ネットワーク関係機関の子育てや高齢者向け事業が絵入りで記載され、地域の中でどのような活動が行われているのか、分かりやすくする配慮をされています。



クリスマス会

活動において工夫していること

子育て関係事業では、親子一緒の参加型事業を行ったり、保育ルームを設けて子育て講演会を開催しています。

高齢者関係事業では、できる限り多くの方に参加してもらえるように、京北地域中心部（周山地区）だけで事業を行うのではなく、地域の広さを考慮して、点在する各地区をできる限り、くまなく巡回しています。各地区での事業では、

介護予防的な筋トレ体操を交えるとともに、参加した高齢者に長寿の秘訣を語ってもらうなど、参加型の内容にしています。また、住民や行政、医療機関、地域包括センター等の参加による、日常の困りごとを解決していく寸劇も採り入れ、福祉や地域医療の制度を高齢者の視点に立って分かりやすく伝えるよう、心がけています。

活動の特徴、活動から学べること

京北わくわく子育てネットワーク事業、京北にこにこ広場運営事業の各団体が統合して、従来はそれぞれで展開されてきた子育て関係と高齢者関係を一緒に企画、実施することで団体間の情報の一元化が可能となったことに加え、幅広いアイデアや事業に膨らみを持たせることができつつあります。例えば、親子で調理実習や交流会を催す「食べるの大好きっ子教室」では、高齢者の方の知恵を借り、若い世代のお母さんに料理のアドバイスをしていただくなど、世代間交流も生まれました。

こうした活動の展開は、よりの確に地域の課題解決に向けた支援を行うための検討を重ね、充実・発展を図られた結果だといえます。

活動における成果

広報誌のカレンダーを利用され、子育て中のお母さんの参加が増え、交流も広がってきています。さらに、「にこにこ広場」や事業に参加することにより、会場やスタッフに子どもたちが慣れてきました。保育ルームを設けて、お母さんと離れても、泣く子どもが非常に少なくなり、開設当初は、スタッフと子どもの1対1での対応だった状況が、大きく変わりつつあります。高齢者関係事業でも、口コミによって、参加者が増え、筋トレをされるサークルができるなど、各地区単位で自主的な取組が広がっています。

今後の方向性・目標

市内でも突出して少子高齢化が進む京北地域で、子育てや高齢期の生活を不安に思っている方がいち早く相談できるよう、支援をしていきたい。また、関係機関とネットワークを組むことで、必要な情報を共有すると同時に、協働して支援に当たることによって、京北地域の住民が安心して楽しく暮らせることを目指し、引き続き活動を進めていきたいとのことです。

松陽防災ネットワーク

地域防災事業 ～防災と福祉の一本化による連携体制の構築～

助成年度	平成20年度
助成金額	200,000円
[地域の概要 (西京区松陽学区)]	

地区人口	9,743人
地区世帯	3,970世帯

<数値は平成22年国勢調査結果による>

地域の状況

松陽学区は、地域全体が西高東低の地形となっていて、東部には国道9号線が走り、平成20年代前半の供用開始を目指し、立体交差事業が進行中です。また、近年の特徴として、若い世代を中心とした人口の増加が目立ち、小学校の児童数も年々増えています。平成19年には学区の長年の悲願であった児童館が開設しました。

活動のきっかけ・目的

学区民生児童委員協議会の会長が防災と地域福祉の関係性に着目し、地域の防災組織である消防団・自主防災会と地域の自治組織である自治連合会、地域福祉の推進組織である学区社会福祉協議会を交え、「松陽防災ネットワーク」を立ち上げました。また、阪神淡路大震災をはじめ、国内の多くの災害が発生するたび、高齢者など、災害弱者の犠牲者が多かったことから、災害時に災害弱者をフォローするためには、消防団や自主防災会といった防災組織だけではなく、民生児童委員や社会福祉協議会など、福祉部門の協力も欠かせないとの問題意識を持っていたことも発足の理由でした。

さらに、松陽学区の真下には樫原水尾断層が通っており、学区全体として地震に対する危機意識があったこともきっかけの一つでした。

活動内容

①災害に強い安心安全なまちづくりの構築、②災害に強い人づくりの実現、③災害弱者の応急活動体制の確立と安否確認の徹底、④地域コミュニティの連帯意識の向上、⑤自助・共助・公助のセーフティネットの確立を事業目的とし、

平成19年度から事業を実施しています。具体的には、①地域ケア会議で災害時に配慮が必要な高齢者について、防災の観点からサポート方法を検討する、②災害時要援護者支援名簿の作成、③一時避難場所の設定及び避難誘導看板の設置、④防災マップの作成、⑤防災用具の充実、⑥AED(※)の講習などを行い、地域防災力の向上を図り、災害時における要援護者の方の救護活動に役立てるとともに、平時からの危機意識の高揚と備えの充実により、安心感を持ってもらえる取組を実施しています。

なお、防災ネットワークとは、自治連合会・民生児童委員協議会・社会福祉協議会・消防団・自主防災会の5団体が連携・協力して立ち上げたものです。(※)AED…自動体外式除細動器



一時避難所へ避難訓練中

活動において工夫していること

前記のとおり、消防団と自主防災会だけではなく、福祉の観点から防災の問題を捉えるために民生児童委員協議会と社会福祉協議会といった福祉団体と自治連合会が参画して事業を実施しています。例えば、災害発生前あるいは発生時の心構えなどを記載した冊子(命のノート)を発行し、全学区民へ配布する、「災害時要援護者名簿」を各自治会長の協力の下、学区独自で作成する(名簿登載者の同意を得ている)、などの福祉的な取組を行っています。とりわけ、名簿については、学区内の最新状況の把握に努め、毎年更新を行い、防災役員及び各自治会長が守秘義務を遵守して管理しています。

活動の特徴、活動から学べること

地域の消防・防災団体と地域福祉団体が連携することにより、要援護者までを網羅した災害時の対策ができていくことが強みです。つまり、防災と福祉の一本化を図った連携体制の構築により、地域防災力を高めることができます。

また、学区内にある総合病院及び特定施設入居者生活介護施設に毎月、定例会に参加してもらうなど、日頃から緊密な連携をとっています。さらに、必要経費の援助も受けており、両施設が地域の活動になくてはならない存在となっています。

災害は子育て世帯も高齢者世帯も同様に被ることから、防災・減災は住民の関心事です。これらを切り口に地域福祉のまちづくりを目指すことは、多くの住民の同意を得られるのではないのでしょうか。そうであれば、地域がまとまるきっかけとしての防災問題を考える中で、要援護者への対応がますます重要になってくるはずです。平時から地域の要援護者の把握（住まいや身体の状態の把握）をするために家を訪問することや、見守りを行うことなどの普段からの活動に発展する可能性があります。ひいては、地域の安心安全にもつながっていくことになります。

ほかにも松陽学区では、学区民や自治会長を集めて、小学校で防災ビデオを観る機会を提供しています。防災への関心を喚起するうえで役に立っている、とのことであり、参考にできる取組です。



「防災訓練」バケツリレー

災害時の備え（物品等）

車イス・リアカー・担架・簡易トイレ・テントといった防災器具をそろえ、防災訓練の際に展示・披露しています。また、電話や携帯電話が不通になるような最悪のケースを想定して、簡易式無線機を8台備え、毎月10日を無線の

日と定め、各防災役員及び区域内の大規模福祉施設間による交信テストを実施しています。

名簿作成時の手順

名簿の掲載基準は、70歳以上で本人の状況区分として、避難困難な高齢者、ひとり暮らしの高齢者、障害のある方、寝たきり、認知症の方です。作成の手法は、自治会長が町内の対象者に対して名簿に掲載することの了承を得たうえで、年齢・親族の緊急連絡先などを聞き、名簿に反映させています。こうした作業を自治会長は、手間を厭わず行ってくれました。また、名簿に載せてもらわなくてもよいという高齢者も少数おり、そういった方は掲載していません。



「防災訓練」全体風景

活動における成果

命のノート、名簿及び一時避難場所の看板といった、目に見える成果と共に、学区民の防災意識・危機意識を高めることができ、名簿を作成することで、高齢者が地域で安心して住める一助ともなりました。

このように、高齢化時代の福祉活動に防災を位置付け、地域コミュニティの連帯意識の向上を図ることができています。

今後の方向性・目標

災害時の状況により近い訓練とするため、避難所の実体験や夜間停電時を想定した防災訓練等、今まで経験したことのない取組を計画し、実現させたい、また、緊急時の防災組織を構築していきたい、さらに、かつて、他学区の取組を聞かせてもらう機会があり、参考になったため、松陽学区の取組を他地域に伝え、推進手法などを広く還元していきたいとのことです。

コスモス会

暮らしの支援 ブルーキャップ

助成年度	平成21年度
助成金額	80,000円

[地域の概要 (西京区福西学区)]

地区人口	6,985人
地区世帯	2,772世帯

<数値は平成22年国勢調査結果による>

地域の状況

福西学区は、洛西ニュータウン内4学区の一つです。同ニュータウンは、戸建て住宅のほか、公営住宅等の集合住宅も多く、多様な世帯が共生する街となっています。しかし、まちびらきから30年が経過し、少子高齢化が進行するなど、課題が現れてきており、人口も減少傾向にあります。

活動のきっかけ・目的

当初は、コスモス会として身体に障害のある方に対するボランティアを行っていました。その後、高齢者向けの茶話会などを別の場所で実施していましたが、洛西福西会館を利用できるようになってからは、ふれあい喫茶を実施しています。そのふれあい喫茶に来てくれる高齢の方からのニーズに対応していくようになり、ブルーキャップの活動が生まれました。

活動内容

日常生活の中でのちょっとした困りごとを地域ぐるみで支え合う相互援助を目的とし、住民が便利で安心して住み続けられる地域を目指します。具体的には、福西地域の高齢者(要介護度などは問わない)や障害のある方、要介護者のいる世帯、一時的に支援が必要になった世帯などを対象に、公的な支援では対象とならない日常の細々としたことに対して、ボランティアスタッフを派遣し、手助けを行います。
※スタッフの派遣は、1時間2人で1,000円です。

(例)庭木の剪定、植木の刈込み、草引き、家事全般(買い物、料理、選択など)、簡単な大工仕事など

なお、当団体は洛西福西会館において、毎週金曜日に「ふれあい喫茶」を営業(時間は午前10時~午後3時)しており、地域の高齢者の憩いの場となっています(今年で8年目を迎えます)。利用者は1日当たり、延べ100名です(コーヒーにお菓子が付いて100円)。



依頼者宅での大掃除①

活動において工夫していること

ブルーキャップの支援活動に対しては月6、7件の依頼があり、比較的軽易な内容が多いものの、時おり高木の剪定など、危険な内容や専門的な内容の依頼があった際は、シルバー人材センターへつなぎ、ボランティアであるからといって無責任にはせずに、誠実な対応をしています。また、そろいのユニフォーム(「ブルーキャップ」のロゴ入り)を製作し(ベストとキャップ)、ボランティア間の団結力を喚起するとともに、例えば庭木の剪定中に隣の方が「ブルーキャップ」のロゴを見て、うちも頼もうか、と宣伝の一環になるなど、固定客だけへのボランティアとせず、支援を必要とする住民へのアプローチも心がけています。



ふれあい喫茶

活動の特徴

ブルーキャップの活動は、そもそもふれあい喫茶に来られる高齢者からの要望で始まったものです。要望を受け、ちょっとした日常生活の手伝いを行う中で、依頼が増え、道具をそろえながら、現在に至っています。このように地域からのニーズが出発点にあるものであり、必要とされ続けていることが分かります。

また、活動拠点を構えられていることも強みです。洛西福西会館は福西地域の公民館ですが、その管理運営はコスモス会をはじめ、老人クラブなど、地域の団体に曜日ごとの持ち回りで任されています。このことから同会館を定期的の使用でき、地域の高齢者の憩いの場となる「ふれあい喫茶」の安定的な運営が可能となっています。



依頼者宅での大掃除②

活動から学べること

ブルーキャップのような助け合い活動が無償で行うか、有償で行うかの判断は、個々の地域、団体の状況に委ねられるところです。支援を受ける側からすると、「無償で来てもらうのは気が

引ける。しかし、いくらか払って来てもらえるのであれば、頼みやすい。」と考える方もおられます。

また、スタッフとして派遣される側も、無償のボランティアよりも有償で活動する方が家族の理解も得やすい、という考え方もあることから、無償・有償の是非の判断は難しく、一律には論じられません。なお、ブルーキャップにおいては、前記のとおり、1時間2名の派遣で1,000円の利用料を受け取っています。そのうち1割をブルーキャップの運営費として充当し、残り9割は派遣したスタッフの報酬として渡しています。

ブルーキャップの立上げに際しては、地域包括支援センターなどにも協力を得ながら、アドバイスをもらう、地域包括支援センターにブルーキャップの広報チラシを置かせてもらう、毎週、ふれあい喫茶にも地域包括支援センターの職員が来られるなど、地域の専門機関と良好な関係を保っています。

スタッフの確保について

積極的に新規スタッフの募集はしていませんが、毎年女性が2、3人ほど活動に加わってこられます。その多くは、クチコミや知り合いのスタッフに連れられて、といった方が多いということです。ただし、男性は放っておいてはなかなか参加してくれないので、老人クラブなど関係団体に意識的にアプローチすることもあります。ブルーキャップでは力仕事の依頼もあり、男性の力がどうしても必要なためです。

スタッフの高齢化も進んでおり、70歳を超えた方も多くおられるため、若い世代の担い手に参加してもらうことが必要となってきました。

活動における成果

地域の高齢者・障害のある方が、いつまでも福西学区で住み続けられる支援ができています。また、スタッフもいきいきとしており、生きがい・やりがいを感じていることです。

今後の方向性・目標

地域にブルーキャップの活動を更に根付かせ、またブルーキャップに依頼してもらうだけでなく、ふれあい喫茶にも来てもらって生きがいや居場所を提供できればうれしいとのことです。

砂川学区社会福祉協議会

第6回砂川学区多世代交流会

助成年度	平成17年度
助成金額	200,000円

[地域の概要（伏見区砂川学区）]

地区人口	14,384人
地区世帯	7,596世帯

<数値は平成22年国勢調査結果による>

地域の状況

砂川学区は、西は鴨川、東は疏水に挟まれた位置にあって、京阪電車やJR、市営地下鉄、近鉄電車が学区の両側を南北に走り、交通の便に恵まれた地域です。砂川学区の年齢別人口は、ほぼ全市平均と同様に、少子・高齢化の傾向にあります。その一方で、20歳台の人口は他の年齢層より多く、単身世帯が全世帯の半数以上を占めていることから、単身マンション等に住む学生や独身者が多いことがうかがえます。

活動のきっかけ・目的

砂川学区の住民と龍谷大学の学生が地域の問題を一緒に考え、共有し、暮らしやすい地域づくりを目指すことを目的に、小学生も交え、交流・意見交換を行う場として設定しました。

また、学生が単に通学路として砂川学区を見るのではなく、地域に愛着を持ち、地域の問題を自分のこととして考えられるようにという目的もあります。



レクリエーション

活動内容

自治連合会・砂川学区社会福祉協議会を軸とした地域の住民の方々と龍谷大学短期大学部、砂川小学校、砂川小学校PTAの方々が参加し、4世代の取組として実施しています。平成17年度から始まり、22年度は6回目の取組となりました。当日は、班に分かれて、大学生が独自に考案したゲームを皆で楽しむことにより打ち解け合った後、意見交換を行いました（参加者約140名）。

また、この多世代交流会以外にも、大学生に地域の役員と砂川小学校校長が砂川地域の歴史や最近の状況を伝える取組を実施したり、独居高齢者や高齢夫婦世帯のお宅を訪問して、砂川学区に関することや、日常生活で困っていることなどについて話を聞く機会を持っています。

活動において工夫していること

前記のとおり、多世代交流会において、最初に年齢に関係なく楽しめるゲームを取り入れ、自然に子どもたちと地域の方及び学生が打ち解けられるような工夫がされていました。

また、ゲームの後の意見交換会では、「将来なりたいもの（地域の方は「子どもの頃なりたかったもの）」と「地域のために自分がしていること」とテーマを2点設定し、皆が平等にかつ前向きに話し合える内容を選ぶ工夫がされていました。

さらに、それぞれの意見を紙に書き、班ごとに大きな模造紙に貼っていくという流れで、最後に全員でその内容を共有し、一体感を高めていました。多世代交流では、例えば地域の高齢者と大学生がいきなり対面しても共通の話題に事欠く可能性があります。当取組のように小学生が参加することで、仲良くなるための間をとりもってくださっています。



意見交換会

活動の特徴、活動から学べること

何よりも地域住民と龍谷大学短期大学部及び砂川小学校の組織的な連携により、4世代の交流が実現できていることが地域の財産であり、強みです。地域、大学、小学校と各組織に連携に熱心な方がおられることが大きな原動力になっています。実際に、この多世代交流会を楽しみにしておられる地域の方も多く、定着した取組になっています（平成23年10月に第7回目を開催）。こうした関係性を構築するノウハウ、そして関係性を保ち続ける努力、これらの蓄積の結果が「多世代交流会」です。

自治連・学区社協・大学・小学校の連携ができ上がるまでには相当の苦労があったはずですが、このようなシステムがどの地域でも取り入れることができるわけではありません。地域内に必ずしも大学があるわけでもなく、またあったとしても必ずしも円滑な連携ができるとは限りません（ただし、学生の実践の場として、地域との連携を求めている大学は多くあります）。各地域の実情に応じて、活動できるところから実践していき、地域にある社会資源との連携を模索する着実な努力の積み重ねが、地域の福祉力のアップに必要なのではないのでしょうか。

参加者の声

○地域の方

- ・年齢の離れた人たちと共に遊べたことが楽しかった（レクリエーション）。
- ・学生さんの進行の下、小学生もきっちりと意見を言ってくれたので、それぞれの意見をうまく言い合えた（意見交換会）。

- ・学生さんに地域を見られていることを意識できた（地域に対する考え方）。

○小学生

- ・地域の人たちが昔の話をして、以前はこんなんやっただんだと思った。

○大学生

- ・さまざまな世代の人たちと交流することで、自分と違った視点や考え方を聞くことができて良かった（意見交流会）。
- ・毎日のように大学に通っているけれども、砂川地域のことを何も知らず、また何も考えずに過ごしてきた。私たち大学生が地域のことを考えながら、小さなことからできることをしていきたいと考えている（地域に対する考え方）。



みんなの前で発表

活動における成果

砂川学区は、学生にとって通学路でしかなく、学区内に下宿している多くの学生は、自らが地域の一員であるという認識を強く持っていません。

しかし、この交流会が地域に関心を持つきっかけとなり、後に、地域福祉に関心を持ち、「地域で暮らすこと」をキーワードにした卒業論文に取り組んだ学生もいるとのことでした。

今後の方向性・目標

交流会に出たくても身体的・精神的に出で来られない方々に対して、大学生の側から訪問するなど、大学から外に出て活動することを考えています。

春日野学区社会福祉協議会

茶房 やどり木

～世代を超えた地域住民がふれあい、子どもや高齢者を地域全体で見守ります～

助成年度	平成23年度
助成金額	70,000円

[地域の概要（伏見区春日野学区）]

地区人口	6,685人
地区世帯	2,845世帯

<数値は平成22年度国勢調査結果による>

地域の状況

春日野学区は、中心を奈良街道が縦断し、洛中と奈良を結ぶ中継地点として古くから栄えた地域で、市営住宅と戸建住宅が多くを占めます。近年では、当学区も急速な少子高齢化や核家族化が進み、大きな課題となっています。

活動のきっかけ・目的

春日野学区は、伏見区の平均を上回る高齢化が進んでいる状況にあり、一人で家に閉じこもりがちな高齢者や同じく部屋から出ず、ゲーム機等で遊ぶ子どもが増えており、かつて見られた、家族や近隣とのつながりが無くなりつつあります。

そこで、春日野学区社会福祉協議会（以下、学区社協）では、第2期伏見区地域福祉活動計画において、「住民相互による要援護高齢者の見守り」を重点プランに掲げ、「地域間の交流を深め、心の絆をつなぐ」ため、高齢者同士の仲間づくり、住み、親しんだ地域で高齢期を楽しむ、そして孤立を防ぐ場である、「健康すこやかサロン」を開催されてきました。23年度は、その取組を更に拡大し、民生委員・児童委員や老人福祉員、各種団体の方々に呼び掛け、子どもや大人も気軽に参加してもらい、高齢者や子どもを地域で見守るとともに、世代を超えた住民の交流及び情報交換の場とするため、「茶房やどり木」を立ち上げられました。



地域の子どもの数多く来店してくれました

活動内容

町内集会所を利用し、子どもから高齢者までの幅広い年齢層の地域住民が集い、交流する場である茶房を定期的に開店されています。

茶房では、自主的に希望された複数の住民の方がボランティアスタッフとして活動し、主にコーヒーなどの飲み物を低廉な価格で提供することで、家族ぐるみ、近所で誘い合って気軽に来ていただけるようにされています。また、地域内に周知ビラを掲示するなど、多くの手をかけ、広報活動が行われています。

開催日は、午前10時30分に開店しますが、既に関店前から、茶房を心待ちにされている方が多数来られ、時間を追うごとに来店者は増え、午前11時には店内が満席の状態、店の外にまで並んで待っている方もおられるほどの盛況が続いています。開催時間中（午前10時30分～午後4時）は、来店者が途切れることなく、集いの場を通して住民同士の輪が広がります。

活動において工夫していること

地域間の交流を深め、心の絆をつなぐためには、まず、ボランティアスタッフ同士が意思疎通を図り、来場される方からの要望や参加された方から耳にした気になる高齢者などの情報を共有する必要があると考えておられます。

来店された方から出された「寒い季節には温かい物をいただけたらありがたい。」との声を聞き逃さず、閉店後、スタッフが集まって話し合い、秋から冬にかけて、ぜんざいをメニューに加えられました。

赤字覚悟で、厳選した食材を使ってぜんざいを提供したところ、参加された方から「心も体も温まって、話にも熱がこもる。」「外で順番を待っている方は申し訳ないと思うけど、居心地が良いので、つつい長居してしまう。」と好評を博しています。

これからも、スタッフ一同、力を合わせて参加される方からの要望・期待に応えていきたいとのことでした。

活動の特徴、活動から学べること

これまでから春日野学区では、春日野自治町内会連合会を中心に、学区社協、民生委員・児童委員、老人福祉員等の各種団体との緊密な連携があったため、地域の方々が積極的に茶房運営に関わっておられます。

また、各種団体を通じて、機関紙や会合の場で茶房の開催日時など、情報提供していただき、学区内への情報の周知が円滑に進められていることも、スタッフや参加者の増加など、茶房に活気を呼び込んでいることにもつながっています。

活動における成果

茶房で多くの地域住民が集い、多世代交流が実現したことは、高齢者の閉じこもり防止につながるだけでなく、民生委員・児童委員、老人福祉員をはじめ、各種団体の住民も参加して、高齢者や子どもたちと語り、情報交換を行う拠点づくりに結び付きました。このことによって、地域ぐるみで取り組む、見守り支援の充実と住民同士の「絆」を強めることができました。



語らいの風景

今後の方向性・目標

この茶房をきっかけに、世代を超えて住民が集い、顔見知りが増え、人の和が輪となって、地域の絆が強くなることを目指しておられます。

また、参加者から支援を必要としている住民について情報提供があった場合は、友愛訪問や安否確認につなげ、単に交流だけで終わらせるのではなく、醍醐南部地域包括支援センターとの連携も図りながら、高齢者の方が安心して暮らすことのできるセーフティーネットになるよう、知恵を出し合って、広がりをもたせていきたいとのことでした。



手作りのメニュー表

いきいき筋トレクラブ日野

見せて元気 やって元気 いきいき筋トレで“健康づくり”

助成年度	平成20年度
助成金額	200,000円

[地域の概要（伏見区日野学区）]

地区人口	8,435人
地区世帯	2,920世帯

<数値は平成22年国勢調査結果による>

地域の状況

市営住宅等の団地と一戸建ての民家等が混在する地域で、高齢者世帯数が200世帯（醍醐支所管内第5位）を超え、高齢化が進む地域です。この状況の中、社会福祉協議会の10年間にわたる健康づくり活動が実を結び、平成17年の国勢調査では、日野学区の85歳以上の女性高齢者が他地域に比べ、長寿であることが判明しています。

活動のきっかけ・目的

日野学区社会福祉協議会の会長が学区の高齢化率の高さに問題意識を持ったことと、介護保険の対象とならない高齢者を対象に何かしたい、と介護予防の観点から取組を開始しました。



「高齢者の体力測定」準備体操

活動内容

中高年・元気な高齢者の方や団体の役員OBが中心になって筋トレボランティア（※）を組織的に養成し、また養成後のボランティアの活躍の場を提供するために、毎月1回、日野小学

校において、高齢者を対象に定期的に筋トレ講習会を開いています。当講習会ではボランティアが筋トレ運動を実践し、参加者に伝えるとともに、新たな担い手の発掘の場とも位置付けています。各町内にボランティアが配置できるように養成し、学区の隅々まで「生活習慣病予防意識」を浸透させることを目標としています。

さらに、平成22年度から、「高齢者の体力測定」と題し、高齢の方に自分の体力レベルを認識してもらう取組を開始しています。また、ここで把握した体力に基づき、体力測定に引き続いて、学区内の名所旧跡をたどる「日野歴史スタンプラリー」（以下、スタンプラリー）では、自分の体力に合ったコースでウォーキングを楽しみました。

※ 筋トレボランティアについては、ヘルスピア21が実施している「京都市高齢者筋カトレーニング普及推進ボランティア養成講座」の受講を要件としています。



「高齢者の体力測定」アッフ&ゴー

活動において工夫していること

地域福祉活動を担う側、担われる側、と二分して考えるのではなく、参加者の中から、担い手を発掘するという点が特徴的であり、この点を生かして、長く続く活動を目指しています。実際に、醍醐老人福祉センターの筋トレ講座に当団体のボランティアを派遣し、醍醐地域の健康づくりに貢献しています。こうした健康づくり、介護予防としての取組は、継続して繰り返

し行うことが効果的であり、実践することにより学区社協への参画者も増え、地域福祉活動の担い手の確保にもつながっています。

さらに、22年度から実施している「高齢者体力測定」においては、前記のとおり、参加者個々の体力レベルを測定するものですが、これだけにとどまらず、スタンプラリーでそれぞれの体力に合ったコース取り(2コース)をして、ウォーキングをするところまでフォローしています。つまり、体力測定を「やりっ放し」にせず、その後の運動の実践まで企画し、確実に日々の運動を行ってもらえるような工夫をしています。実際に体力測定に参加した方の約7割が、スタンプラリーに参加されていました。

それぞれの取組についての目標を「高齢者が生きがいをもって健康に暮らす」と定め、その担い手を発掘することを通して、地域の活性化を図っています。

なお、スタンプラリーに使用する台紙に地域の方がイラストを描かれたり、名所案内も寺社仏閣の歴史などに造詣の深い方が行われたり、と地域の様々な人材を生かした形で実践されています。



「高齢者の体力測定」5m歩行

活動の特徴

各取組の参加者が多く、当団体の活動が地域に根ざし定着していること、またボランティアスタッフもそろっており、地域の協力体制が整っていることがうかがわれます。

また、かねてから、京都大学や地域介護予防推進センターと連携し、健康づくりを継続しています。このように、専門機関と継続的な関係を持ち続けることは学区の財産であり、困ったときに相談ができる専門機関があることも活動を継続するうえで重要です。

活動から学べること

健康づくりやスタンプラリーにしても、こうした取組は、「参加して楽しい」ということが一番重要です。この取組は、全員で体を動かし、結果を全員で共有することで、自然と楽しい雰囲気を作り出せ、実際に皆さんが楽しそうに和気あいあいと参加されていました。

このように、参加者が「参加して楽しい」と思い、スタッフも「楽しんでもらえてよかった」、「自分も楽しかった」という点を重視することが参加者やスタッフを増やし、ひいては地域を活性化するための契機となるかもしれません。

また、「何を」するかですが、日野学区は高齢化率が高いことを踏まえ、問題意識を持ってその課題に沿った取組を実践されています。的確に課題をすくい取る力と、それを活動に結び付ける推進力や実行力が問われるところです。

次に、この筋トレをいかに広めるかですが、「自分でやってみて」「他人にやってみせる」ということでサポーターの発掘、ボランティアの組織化に取り組まれています。運動を広めていくことは共通の課題ですが、他の地域の活動の参考になるのではないのでしょうか。

さらに、スタンプラリーでは、高齢者から若い世帯、子どもまで、約130名が参加していました。名所旧跡を巡ることで、若い世帯や子どもには、地域に愛着を持ってもらえる良い機会となりました。また、知的障害のある地域の方も参加されるなど、全住民をカバーした「ソーシャルインクルージョン」(※)の実践があり、他の地域での同様な活動の広がりが期待されます。

(※) ソーシャルインクルージョン…社会的包容力

今後の方向性・目標

高齢化がもっと進むであろう、5年先のまちづくりのビジョンをつくりたい。元気な高齢者が増えることを目標に、そのためにできることとして、まずは地域内にある福祉や医療関係の施設等を記載した「福祉マップ」(仮称)を作成し、地域の住民に配布して、各種の相談や健康診断等に足を運んでもらいやすいようにしたいとのことです。

さらに、取組内容の充実を図るため、運動器具を導入することと、安定的に活動を継続させるための活動拠点を確保したいとのことです。

ラウンドアイズ京都

ラウンドアイズ京都 ～子どもの自主的な社会参加に向けて～

助成年度	平成18年度
助成金額	200,000円

活動のきっかけ・目的

ラウンドアイズ京都は、若者の市民参加の仕組み作りを考えるプロジェクト「WACCORD」（財団法人京都市ユースサービス協会と京都市により企画・運営）が提案した企画の一つです。

若者の地域活動への参加の必要性が認識されている中、特にそれまで地域と関わりのなかった若者が急に地域活動に参加することは難しいのではないかと、そうした思いから、子どもの自主的な地域参加を主旨に、小さな頃から、自分たちの住んでいる地域を知り、考え、愛着を持つことで、将来の京都を担う若者を育てることを目指し、活動を開始しました。

活動内容

特定の地域で、子どもが中心になり、学生スタッフがサポートする形で「まちを知る」、「まちへ提案する」、「提案を実現する」活動を行っています。

例えば、平成22年度は子どもたちが興味を持った「カルタ」を作成し、西陣地域の名所やお店を読み札の内容に盛り込む工夫をしました。活動には、地域の方々に協力してもらい、材料集めのための実地調査を行う中で、子どもたちの主体性を養うことができ、また地域と子どものつながりも育まれました。

このように、子どもが関心を持ったテーマをツールにして、地域の中に入り、地域の活性化を図るとともに、子どもが地域の活動に参加しやすい環境と、子ども自身が地域の活動への親しみが生まれる素地作りの支援をしています。



カルタ作成前の現地訪問

活動において工夫していること

当初は、(財)京都市ユースサービス協会が当団体の運営をサポートし、ラウンドアイズの活動はユースサービス協会との共催として実施していましたが、ユースサービス協会から「自主的に運営をしてみないか」と打診され、平成21年度からは当団体の自主的な活動として運営を行い、ユースサービス協会からは「必要なときに必要な支援を受ける」という形に見直しました。このおかげで、学生スタッフの間で主体性や責任感がより強くなったということです。



カルタの作成風景

活動の特徴

学生が主体であるため、子どもと年齢が近いこともあって、意思疎通を図りやすい点が強みです。また、子ども達も学生を慕っており、当団体の活動がある日は、子どもたちが何をさておいてもこの活動に参加したい、と言うようにまでなりました。

西陣や宇多野地域をベースに活動していますが、これまでの実績から、地域に確実に根付き、「また来てほしい」との評判を得るに至っています。これは子どもたちだけではなく、その保護者や地域住民にとっても、地域について考える契機になったからとも考えられます。

さらに、スタッフが20人と小規模であるため、「自分の言ったことが実現しやすい」というメリットがあり、学生の主体的な参加を望みやすいのも特徴的です。

活動から学べること

実際に地域で活動をするに当たって、活動1回当たり2~3回のミーティングを行っています。ミーティングへの参加は強制ではありませんが、少し多いくらいの回数で実施し、スタッフ間のコミュニケーションを密にしています。また、ミーティング中は活動歴の浅いスタッフも含めて、誰もが意見を言いやすい雰囲気を作り、スタッフ全員が主体的に参加できるような環境を最も大切にしています。

さらに、当団体は、以下の4つの活動理念を掲げ、スタッフの共通認識を図っています。

- ①継続性…子どもが継続的に学校外での活動を通して学習できる。
- ②子どもの主体性…子どもが主体となり、地域課題の発見と改善策を考えるプロセスに関わる。
- ③異年齢交流…子どもが高校生や学生、社会人、そして地域の多様な人たちと交流する場とする。
- ④参加の場…子どものときから、自分たちの身の回りのことに関心を持ち、市民参加へとつながる場とする。

このように、スタッフの団結力を強め、共通認識を図ることのできる仕組みは重要です。



作成したカルタ

子どもと接するとき心がけていること

- 子どもの主体性を養うために、子どもの意見を初めから否定せず、よく耳を傾ける。
- まずはスタッフが楽しむこと。
- 子どもも自分も成長できるように活動する。
- 子どもは、こちらの言ったことをきちんと覚えているので、子ども相手だからといって、適当なことはせず、約束は守るようにしている。

活動における成果

- 子どもにとって
地域の方とのふれあいの中で、自分が住む地域について知り、考えるきっかけとなっています。また、多様な世代・職種の方と関わることにより、普段はなかなか経験できないことに取り組みました。
- 地域にとって
子どもたちを通じ、自分たちのまちを見つめ直すきっかけとなりました。

今後の方向性・目標

活動歴の浅いスタッフが多いため、ベテランのスタッフが卒業しても活動が継続できるようにしたい。

また、もっと多くの子どもに参加してもらえようような仕組みを考えたい。それに応じたスタッフの数や質も整えていきたいとのこと。

一般財団法人まちの縁側クニハウス&まちの学び舎ハルハウス

第1回世代間交流「ふれあい教室」

助成年度	平成21年度
助成金額	155,000円

活動のきっかけ・目的

平成11年に代表理事の地盤である名古屋で「クニハウス」を設立。また、代表理事が佛教大学で教鞭をとっていた関係から、平成15年、京都において「ハルハウス」を設立。地域に美田を残し、次代に生活の知恵を引き継いでいくために交流を育む拠点としての機能を果たすことを目的としています。

活動内容

住み慣れた地域で、お互いに助け合い、支え合って、健やかな生活を実現することを目的とし、「まちの学び舎ハルハウス」を拠点に、以下の事業を行っています。

- 1) 乳児から高齢者まで、いつでも誰でもほっとできる居場所で世代間交流を図る。
地域住民が誰でも気兼ねなく立ち寄れるフリースペースとして開放します。
- 2) 地域活動拠点としてのまちづくりの各種イベントを開催する。
世代間交流「ふれあい教室」や「一品持ち寄り新年交流会」をはじめ、高齢者や子ども及び障害のある方など、多様な方が参加できる企画を開催します。
- 3) 「京雑炊ハルハウス」において、ひきこもり・ニート・不登校などの課題を抱えた若者の就労訓練を実施する。
「京雑炊ハルハウス」とは、当施設の1階において毎朝、朝食を提供している事業(有料)。
- 4) 多目的福祉施設の一環として、3階のシェアルームを留学生に貸し出し、国際交流の拠点とする。
なお、「まちの学び舎ハルハウス」とは、当団体の代表理事が建物を整備し、作り上げた地域の拠点施設です。

また、10名程度のスタッフがいますが、「京雑炊ハルハウス」のために1名を有給で雇用しているほかは無償のボランティアスタッフです。



「ふれあい教室」①



「ふれあい教室」②

活動において工夫していること

「ふれあい教室」では、精神に障害のある方がビーズでのアクセサリ作りとアクリルたわし作りを教える講師となって、来場者と交流を持ちました。来場者は地域の方や学生が多く、障害のある方との交流は貴重なものでした。

また、「京雑炊ハルハウス」の運営の中で、「困難を抱える若者の就労準備訓練支援」として、毎朝6時から8時まで、対人コミュニケーションを苦手とする学生(引きこもり、不登校)が、掃除や皿洗いなどをし、社会に出るに当たって

の訓練の場を提供しています。「いつでも誰でも気軽に来られる地域の居場所」を趣旨に、ハルハウスを提供していますが、こうした「自分から来られる方」を待っているだけではなく、「放っておいては居場所に来られないであろう方」へのアプローチも行っています。訪問当日は、対人コミュニケーションに不安を持っている方と、大学で不登校になり、ゼミの先生からの依頼を受け、訓練生として来られている方がおられました。



アクリルたわし

活動の特徴

代表理事が勤めていた佛教大学との強い関係があり、活動に学生を呼び込めることが強みです。また、大学生だけではなく、地域の小学校にも協力してもらい、小学生がふれあい教室に参加できる関係を築くことができています。

当組は、全国的にも有名で、かつ先進的であるため、日本各地から視察に来られる団体が多いとのことです。ハルハウスの取組がきっかけとなって、全国にこうした居場所ができていく傾向を進めるといふ波及効果が認められます。

また、マスコミに取り上げられることが多く、特に催し物があると、事前に掲載してもらえることもあり、こうした記事を見て、来場される方もおられます。

活動から学べること

他の助成制度の申請を行う際に、「京・地域福祉パイロット事業」の助成を受けたことも強みになっています。つまり、公的な助成を受けたことが当該団体の活動の信頼性を高める効果を生んでおり、このために次の助成を受けやすくなっています。この実績を生かし、当団体では

積極的に各種助成制度への申請を行っています。また、様々な問題を抱え、居場所まで来られない若者に対して、意識的にアプローチしていることも特徴的であり、このような試みは、他の団体でも参考にできるのではないのでしょうか。



京雑炊

活動を継続するためのコツ

地域や関係者・関係機関とのつながりを築くことが大切です。つながりとは、一方的なものではなく、当施設を居場所・拠点として活用していただくとともに、地域や関係機関から知識や情報を得るなど、ギブ&テイクの関係を念頭に置きながら、活動しています。そのためにも、地道に活動し、いつでも施設をオープンにしておくことが大切とのことです。

活動における成果

対人コミュニケーションを苦手とする大学生が、ハルハウスでの訓練を経て、授業に出られるようになった、話す声が大きくなった、またヘルパーの資格を取得するための勉強を始めたなど、目に見えた効果が出ています。前向きに生活できる支援ができていると感じています。

今後の方向性・目標

身体的・精神的な状態からハルハウスまで出てこられない方へ手を差し伸べていきたい。地域での孤立を防ぐため、例えば毎朝の見守りを兼ねてのモーニングコールなど、多様なやり方でアプローチしていきたいとのことです。

また、おにぎりを対人コミュニケーションの苦手な方と大学構内で販売するなど、ハルハウスから一歩外に出て、活動の機会を増やしたいとのことです。

子育てサポーター養成講座 ～子育てをしやすい地域づくりを目指して～

助成年度	平成22年度
助成金額	253,050円

活動のきっかけ・目的

小さい子どもを持つお母さん方の社会参加を応援する手立ての1つとして、保育サポートを各プログラムや講座に付けられないか、との思いが当団体にはあり、「子育て」をサポートする講座を開催することにしました。保育ボランティアの増加は、当団体の取組だけではなく、広く社会一般におけるお母さん方の社会参加を促進することに役立てられます。



絵本の見せ方

活動内容

子育て中の親が子育ての迷いや悩みを一人で抱え、社会から孤立し、ときには虐待の引き金になってしまうこともあります。子育てには親だけではなく、多くの人々の関わりが重要であるとの観点から、当団体では、様々な人が子どもに関わる、「子育てをしやすい地域づくり」を目指して当講座を実施し、子育てに対する理解のある人を地域に増やします。

また、一連のものとして、具体的に子どもに絵本の読み語りを行うボランティアを養成する「お話ボランティア研修」も実施しました。

このように地域の方が子育てをサポートすることで、子育てを社会化し、親子の孤立を防ぐ

と同時に、子どもも大人も家庭以外のいろいろな集団の中で自ら学べる土壌を地域につくることを目的としました。

この目的を達成するため、事業を2部構成で実施。第1部は「子育てサポーター養成講座」として、対人援助の基本や親が感じる子育てのプレッシャー、虐待とその影響について学びました。また、あらかじめ登録した受講生だけではなく、一般に公開する講座も設け、より多くの市民が子どもと子どもを取り巻く社会に目を向ける啓発の機会と位置付けました。第2部では、「絵本は子どもとコミュニケーションを図る一つのツール」とであるという考えの下、子どもたちへの絵本の橋渡しが的確に行われるよう、「お話ボランティア研修」を実施し、絵本の選び方や読み方を学びました。



発声練習

◎活動の内容（訪問時）

①絵本とお話研修 Part 1（講義編）
10:30～12:30

②絵本とお話研修 Part 2（実技編）
10:30 講師講演

11:15 グループ実習

12:10～グループ実習を受けての講師
によるまとめ

12:30 終了



グループ実習①

活動の特徴、活動から学べること

かねてから、子育て関係の取組を実施してきたことから、子育て支援や講座運営のノウハウを持っており、講座をスムーズに運営できていました。

さらに、各参加者の意識が高く、真剣に受講され、①と②の両日で欠席者はいませんでした。これは、高い意識の現れと共に、受講料が設定されていたことも要因ではないかと思われます。

技術は必要ですが、特に、子育てに関わる女性には馴染みがあるため、絵本の読み語りや、ボランティアとして始めやすい分野といえるかもしれません。

このように、ボランティアを養成する際には、始めやすい具体的な分野を設定することも検討する価値があるといえます。

活動で工夫していること

参加しやすい時間設定にするとともに、内容は、講座→実技、総論→各論と理解しやすい流れで構成されています。「お話ボランティア研修」では実際の絵本を題材に、実技を多く取り入れ、講義を聞くだけでなく、実践に役立つスキルと興味を持って習得できるよう工夫されています。

こうした研修は、新たにボランティアを始めたいと思っている方にとっては、「今後も続けていきたい」という意識を持ってもらえること、既にボランティア経験のある方には、ボランティアを続けるモチベーションを維持し続けてもらうことが重要であり、そのために、仲間づくりの一環としても機能するグループ実習の設定は有効です。

地域の課題、ニーズを把握する方法

当団体で実施している親子プログラムに参加される親子や、その他のプログラムの多世代にわたる参加者から、生の声を拾います。

また、地域で連携している他団体との情報交換等によって、課題やニーズを把握します。



グループ実習②

活動における成果

子どもに関するボランティアをこれから始める方にとっては、きっかけとして、また既に活動をされている方にとっては、経験に磨きをかけてもらえる機会となりました。

今後の方向性・目標

当講座を修了した受講者は希望すると、京都YWCAの「保育サポーター」として登録されます。サポーター同士が出会い、学びあう場として、グループを形成し活動することにより、プログラムや講座時の保育にとどまらず、自分たちの関心を深め、スキルアップにつながるようなプログラムを企画するなど、より広範囲にわたる展開を期待しています。

また、親子を取り巻く環境は、日々刻々と変化しているため、ニーズを敏感に感じ取り、社会に向けて発信することも視野に入れた講座の開催を今後も継続していきたいとのことです。

男性介護者を支援する会

男性介護者支援事業

～男性介護者がつながり、支え合うことで孤立を防ぎ、介護負担の軽減をサポートします～

助成年度	平成23年度
助成金額	300,000円

活動のきっかけ・目的

京都市における介護保険制度の介護サービス利用者数は、約5万2千人（平成23年4月時点）で、制度発足時と比べ、2倍以上の増加になりました。また、平成23年に発表された「平成22年 国民生活基礎調査の概況（厚生労働省）」では、要介護者等との続柄別にみた主な介護者の構成割合のうち、男性が約30%となり、前回調査時の割合を上回るなど、介護を要する方の増加及び全国的な傾向でもある、男性による介護が増え続けている状況です。

男性が突然、介護をしなければならなくなった時、これまで、あまり経験しなかった不慣れた家事をする、介護経験がないことから先が見えない、介護についての相談相手がいない、更には、経済面で、家計にとって最も重要な仕事を減らさないと、介護ができなくなってしまうなど、様々な問題が次々に生じることとなります。

親族の介護を始めて19年目を迎える当会の代表が、このような自らの実体験を生かして、急増している男性介護者が孤立することなく、男性介護者相互の情報交換と支え合いの活動を当事者が主体となって、地域に広めること、また、当事者が活動することを通じ、介護に関わる専門職や支援者が、男性介護者への理解を深め、支援に生かしていくことを目指し、活動を始めました。



男性介護者の集い「TOMO」の様子

活動内容

当会は、協力スタッフ、支援者、男性介護者とその家族で構成され、毎月2回、「喫茶ほっとはあと（障害者就労支援センターほっとはあと）」の協力により、無料で店内の一角のスペースを借りて、男性介護者の集い「TOMO」を開いています。

全市域から、毎回約30人程が訪れ、ほとんどの回で、予定時間（11時30分～14時）を超えて様々な介護に関わる悩みを話し合い、情報を交わす状況が続いています。

また、この集いのほかにも、介護者同士の交流、スキルアップのための研修会、ワークショップ、料理教室等を年数回にわたり開催するとともに、男性介護者問題に詳しい専門家を招き、講演会を開催しました。毎月、活動報告や介護体験を掲載した会報も発行するなど、活動範囲を広げ、男性介護者をいろんな形でサポートする取組を行っています。



KYOのあけぼのフェスティバルで「お弁当づくり」を体験

活動において工夫していること

集いの場所を会館等の会議室を借りて開催すると、堅苦しく、気軽に出入りができないと感じられる方もいるため、いつでも、誰でも立ち寄り、かつ交通が至便な所（ほっとはあと：西大路御池）を選んでいきます。

集いの開催日も毎月第2水・木曜日のお昼を挟んだ時間帯とし、参加者各自で食事やお茶を飲みながら、リラックスしてゆっくりと話ができる雰囲気づくりを心掛けています。

集いでは、決まったルールを設けず、相談をしたい、悩みを聞いてほしいといった参加者が、自由に会場に入り、都合に応じて出られるようにしています。

さらに、集いだけに限りませんが、当会の方針として、男性のみを受け入れるのではなく、女性であっても、また、介護者でなくても受け入れることにより、開放的で柔軟性のあるものとする事で、多くの方に話をしてもらい、そして多種多様な意見を聞いて、視野や考え方を広げてもらうことにより、自分を見つめ直し、気持ちを和らげていただくようにしています。



男性介護者と介護に携わる方達が参加した講演会

活動の特徴・活動から学べること

男性介護者に多くある傾向として、介護の悩みなどをなかなか人に話すことができないことにより、一人で抱え込んでしまう。社会参加も積極的にしない中で、解決の糸口が見えず、自分だけで抱え込むことにより、虐待といった危険な事態にまで発展してしまう可能性があります。そういう心の負荷を少しでも軽くしてもらえるような、男性介護者の一つのよりどころ、息抜きの場でもある集い「TOMO」を設けました。

最初は、苦痛の面持ちで緊張しながら話し始める方も、くつろいだ雰囲気ですぐに打ち解けると、自分が経験している、又は経験した介護の悩みを語り合い、家庭内ではじっと抑え込ん

でいる喜怒哀楽を表現されます。その場では具体的な解決に至らなくても、自分の周囲には、こんな状況の方がいる、同じような立場の方がいるということを知ることだけでも、介護に携わる負担感や悩みが少し軽減され、心強さに結び付きます。

活動における成果

男性介護者を支援する会を立ち上げてから、2年ほどですが、日々の活動が短期間のうちに新聞をはじめ、さまざまな報道機関で取り上げられるなど、市内外で認知度が高まりつつあります。そうしたことを受け、参加人数が増え、会の活動を共に考える仲間の輪も広がってきました。

また、関係諸団体と交流を図り、情報を共有することが重要と考え、少しでも諸問題が改善されるように、行政・福祉施設・医療機関との連携を図るとともに、会としての活動の内容を充実させ、視野を広げるため、介護に関するセミナーや勉強会に参加するなど、積極的に他団体とも交流を持つことで、協力が得られつつあり、横のつながりが生まれています。

今後の方向性・目標

男性介護者が孤立せず、安定した生活をするための社会的なバックアップや受皿を増やすため、行政や地域包括支援センター等とも更に連携をしていき、男性介護者がどこに行けば適切な相談や支援を受けられるのかをアドバイスできるようにできれば良い。

さらに、地域に出て、悩みごとなどの聞き取りができるスタッフの養成や自宅で悪戦苦闘している男性介護者を掘り起こすといった活動を積み重ねる中で、孤立し、困っている男性介護者を、人と人のつながりで支援していきたい。

介護者には、ワークライフバランスにプラスしてケアが必要であり、どれが欠けてもバランスが崩れてしまう。このため、経験に基づいたアドバイスをはじめとして、何よりも精神的なストレスを抱える男性介護者の心のケアを中心とした活動を引き続き行っていきたいとのことです。

京・地域福祉パイロット事業 活動事例集

平成24年3月発行

京都市保健福祉局生活福祉部地域福祉課

電話 075-251-1175

FAX 075-257-4652

〒604-0954

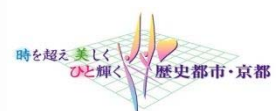
京都市中京区寺町通御池下る下本能寺前町 500-1

中信御池ビル3階

<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/soshiki/8-2-4-0-0.html>

京都市印刷物第

号



「百年分の、ありがとう」